

無欲ほど

きな

しあわせ

無欲ほど

大きな

しあわせ



無欲ほど

# 大

きなしあわせ

## 目次

第一章	出生の意義	5
第二章	初めての行 <small>ぎょう</small>	19
第三章	天啓	35
第四章	人を救う仕事へ	53
第五章	縁あって	67
第六章	心の苦行	79
第七章	結婚	91
第八章	巣立ち	105

第九章	信念を貫く心	117
第十章	宗教法人として	129
第十一章	半身不随に	137
第十二章	母と子	151
第十三章	道場の広がり	169
第十四章	信じきる心	183
第十五章	開運の神「 <small>うんこどっし</small> 運子童子」の誕生	193
第十六章	次へと受け継ぐ	207
第十七章	だるまの行	227
第十八章	五十年という時を歩んで	235

第一章

出生の意義



人は、幸せになるために生まれてきます。神仏は、すべての方々を幸せにしたいと思いい、この世に生を下さいます。どんなにつらいことがあっても、生きていることに感謝し、困難の中にも希望を持って前向きに進めば、必ず幸せな人生を歩むことができます。

人には、現在の人生である「現世」があります。そして生まれる前には「前世」というものがあります。前世は現世とつながっていますし、そして来世にもつながっています。日ごろ、皆様をお導きする立場にある私ですが、私もまた、前世、現世、来世を強く感じずにはいられない身の上に生まれてきました。

私がこの世に生を受けたのは、一九四一年のこと。日本は太平洋戦争中の時代にありました。私は「和子」と命名されたのですが、普通の赤ん坊とは違う生まれ方をしました。早産で生まれ、母のお腹から出てきた私は、手のひらに乗るほどの大きさしかなく、しかも仮死状態だったそうです。いまで言う「超未熟児」です。なぜこのような状態で生まれてきたのか。それをお話しする前に、まず私の両親、そして前世の



ことについてお話ししなければなりません。

私の母は、京都のとある旧家に生まれました。事業家として手広く商いをする父のもと、幼い頃から何不自由なく育ったそうです。大阪に移り住んだのは、父親の商いが傾いたのがきっかけですが、それまでは、令嬢のような暮らしをしていたそうです。一方、父は、若いころから孝行息子として近所の評判も良く、のちに画家として生計を立てるに至りました。

あるとき、二人の間に縁談が持ち上がりました。父の親孝行ぶりが母方の親族の耳に入り、二人を結婚させてはどうか、という話になったのです。しかし、問題が起きました。母方の父が猛反対したのです。

ですが、一人は非常に強い縁で結ばれていました。しばらくして母方の父が亡くなったあと、親族の間で、もう一度「あの二人を結婚させよう」という話が持ち上がったのです。結婚に反対する人はほかになく、父と母は晴れて夫婦になりました。

結婚当時、世の中は戦争の気運に満ちていました。人々の生活は節約の連続で、贅沢はもちろん、暮らしに必要な物資にすらこと欠いていました。

そんな中、母は私を身ごもりました。私の母は、急性の腸の病を患っていた父を看病するため、父が療養している二階の部屋に、毎日何十回と通っていました。身重の体で、階段を何度も昇り降りするのは大変だったと思いますが、母は父に献身的に尽くし、二階で寝起きをともにしながら、いつも寄り添っていました。

昔は、病気をしても自宅で療養するのが当たり前でした。その上、戦時中ですから、栄養状態も悪く、医療も十分に整っていません。そのような環境にありながらも、母は親身になって父の看護をしたのだと思います。そのうち、身重の母に、父の病が感染してしまい、母は大きなお腹を抱えながら、お粥すら食べられないほどに衰弱しました。

弱った母体の中で、赤子が健康に育つはずはありません。とうとう、母は十カ月の臨月を待たずして、妊娠七カ月で早産するという事態になってしまったのです。いま

でこそ、医学の発達により、未熟児で生まれても助かる術がありますが、当時は、早すぎる出産によつて、赤子も母親も命の危険にさらされる時代です。二人とも助かる見込みはありませんでした。

母が産気づいたとき、家族は「これは大変だ」と、すぐに医者を呼びに行きました。しかし、医者到着が間に合わず、近くの産婆さんが私を取り上げるようになりました。

私は、「おぎゃあ」という産声を一声発しただけで、産湯に浸かる前には仮死状態に陥りました。まだ自宅出産が主流でしたし、保育器のような高度な医療機器も身近な病院にはありませんでした。あまりにも小さく、息をしていない赤ん坊の私を、産婆さんは「ダメかもしれないが、生き返りはしないか」と体ごと大きく振り回したそうです。子どもは助からなくても、母親さえ助かれればよい、という考えが頭にあったからです。いまでは信じられないかもしれませんが、あのころは、そんな世の中だったのです。

私は、神のご加護がなければ、生きられるはずのない赤ちゃんでした。しかし、奇跡的に命を取り留め、超未熟児ながら、自宅で用心しながら育てられることとなりました。このように、私の人生は出生のときから波乱に満ちていました。

実はこれには、父と母、両家の深い因縁がありました。つまり、私の前世が関係していたのです。私の前世は、浅田家に誠心誠意尽くしたのにもかかわらず、結婚が叶わず、自らの命を絶ってしまった女性でした。そんな前世の業を背負って浅田家に生まれてきたのが、私だったのです。

前世がとつた様々な行動や行いは、いいことも悪いことも現世に現れてきます。どんなに生きるのがつらいからと言って、自らの命を絶ってしまうと、それが来世に影響し、さらにつらい苦しみとなって現れるのです。そのことを、私は生まれたときから我が身で味わってきたように思います。

命を取り留めたあとも、弱々しく、生死の境をさまよう赤子だった私を、目に入れても痛くないほど慈しんでくれたのが、私の祖母です。孫の誕生を今か今かと待ち望

んでいた祖母は、小さく生まれた私を死なすまいと、暑い夏の終わりにもかかわらず、湯たんぽを三つも用意し、私の体を冷やさないよう細心の注意を払って温め、かいがいしく世話してくれました。こうした真綿でくるむような祖母の世話があったからこそ、私は命をつなぎ止めることができました。

両親もまた、私を大切に育ててくれました。しかしその一方で、わが子の発育が他の子どもと比べて著しく悪いことに、大きな不安を感じていました。多くの赤ちゃんは、一歳を待たずにハイハイを始めますが、私がハイハイを始めたのは二歳になつてからです。超未熟児で生まれたせいか、人より成長が一年くらい遅かったのです。

しかも、体が弱く、いつ何があってもおかしくない健康状態でした。医師からは無情にも「この子は早死にする」ときっぱり宣告されていたほどです。だから、両親は「この子に、もしものことがあったら」と、心が休まる時がなかったのです。

しかし、体は虚弱に見えても、私はみなぎるような生命力を持つ子どもでした。母親の乳には自分から吸い付いていき、必死で母乳を求めました。そして、物心つくこ

ろになると、大人にも負けない、芯の強さを發揮していきました。

三、四歳児のとき、私はまだ足腰が十分に成長しておらず、自分ではちゃんと歩いているつもりなのに、ひよろひよるとした歩き方しかできませんでした。そんな私を、道行く人は興味本位の好奇心な目で見ました。ですが、私は幼いながら「自分は悪いことは何もしていない」と、そんな大人の視線を避けるどころか、まっすぐに見返していたのです。

小学生になっても、私の体は他の子と違い、虚弱なままでした。それが原因で、通学中に悪ガキの子たちに「おい、こっち向け」と石を投げられたこともありましたが、でも、家に帰るころにはケロッとしていて、鼻歌を歌いながら帰宅していました。

また、「負けるもんか。これで勉強ができれば、もっとバカにされる」という気持ちから、勉強だけは努力を重ねました。しかし、祖母は私のことをとても心配していて「学校でいじめられていなければよいが…」と思い、登下校する私を毎日影か

から見守っていたそうです。

私は、家族、担任の先生、友達に大変恵まれていたと思います。ですから、自分の体の不自由さを全く意識することなく過ごすことができました。そして、人ができることを自分にできないはずがない、との強い思いを胸に、何でも自分でできるよう、人の二倍も三倍も努力をしました。夜は遅くまで起きている体力がないので、短時間の勉強を毎日コツコツと繰り返しました。歩行が不安定でも、自分から重たい荷物を持ちましたし、友達に支えられて歩いた記憶もありません。踊りが好きだったので、自分で着物を着て盆踊りにもすすんで参加していました。

中学生のとき、家庭科の時間で、ミシンを使う授業がありました。当時のミシンは足踏みミシンと言って、足でペダルを踏んでミシンを動かすのですが、私は手と足のバランスが悪く、健康な方なら五分もせず習得できる動きが上手にできず、最初はうまく縫うことができませんでした。でも「何とかできるようにしたい」との思いから、一日に一〜二時間ずつ練習したところ、一週間目には普通にミシンをかけられ

るようになりました。このとき私は「人は努力次第でなんとでもなる」と実感したのです。

周囲の人は、私が体に不自由を抱えていることに気づいていたと思います。でも私は、それを感じさせないほど、ほかの子と同じように、何でも自分でやり、何にでも挑戦しました。高校生のとき、体育の授業で校庭をマラソンしているとき、足を引かずるように走っているのを見て、初めて先生が「お前、足が悪いのか？」と声をかけました。そのとき私は「はい。私、足が悪いんです」と元気よく答えました。そのくらい、私は明るく朗らかな子だったので。

ほかの子ができることは、何でも自分でやりたいと思う芯の強さが、私の体の中に宿っていました。私は、体は不自由だったかもしれないかもしれませんが、心までは、不自由ではなかったのです。

自分で何でもできるようにするとは、自分の足で立つこと、すなわち「自立心」です。自立心を持って懸命に努力すれば、おのずと道が開けるのです。どんな逆境にあっ



ても、ハンデがあっても、がんばっていれば人並み以上になれますし、やがてまわりも認めてくれるようになります。努力にまさるものはないのです。

私のおかしな歩き方を見て、世間の人はあれこれ言いましたが、先生や友達など、まわりにいる人たちは、私にとても良くしてくれました。体にハンディキャップがあると、いじめられたり後ろ指を指されたりすることで、性格がゆがんでしまうことがあります。私は、家族のあふれる愛情と、周囲のあたたかさのおかげで、ゆがむことなく、真つすぐに育つたのだと思います。

生まれつき体が弱い方、五体満足で生まれてこなかった方、世の中には様々な方がいらつしやると思います。私のもとにも、そのような方がたくさん来られます。しかし、体が思うようにならないことを悲しむあまり、死にたいと願ったり、周囲の人につらく当たってしまったのは、幸せになれるどころか、ますます不幸の淵へと落ちていきます。どれだけ人生に落胆することがあったとしても、どんなにつらいことがある

うとも、「必ず幸せになる」という一念を持ち、努力を続け、堂々としていれば、幸せは必ずやってくるのです。

幸せかどうかは、「心の持ち方」で決まります。周囲に感謝し、生きていることを有り難く感じながら毎日を過ごせば、おのずと幸せが引き寄せられます。幼少期の私を思い出すと、それはまぎれもない真理だと、思わずにはいられないのです。



第二章

初めての行

ぎよう



私が「行」、すなわち修行の世界に入ったのは、十一歳のとき、まだ小学五年生の時分でした。厚い信仰心があったから入信したのではなく、ただ「わが子の命を助けたい」という家族の願いのもと、流されるように信仰の道に入っていきましました。そこから、どうやって現在のようない「人を救う」という固い信念を持つに至ったか、そのいきさつについてお話ししましょう。

私が小学校の高学年になったときのことです。あるとき私は、胸から玉のような固まりが上がってくるような、何ともいえない体調の悪さに襲われました。横になっても眠ることができず、祖母や母が毎晩私をおんぶしてくれて、その背中であんなに眠りについていたような状態でした。しかし、医者に診せても「原因不明」と言われるばかりで、手の施しようがありませんでした。

そんな私に手を差し伸べてくれた人が、祖母の知り合いでした。祖母はとても信仰心の厚い人で、毎日神棚に手を合わせるのを欠かしませんでした。もちろん、小さかった私は、信仰がどんなものか、そのときは知るよしもありませんでしたが、ときどき

祖母に連れられては、信仰を通じた知人のもとに遊びに行っていました。

ある日、いつものように祖母に連れられ、祖母の知人の家に遊びに行った帰り、私の足が、急にこんなにやくのようになりにやふになり、体にまったく力が入らなくなつて、一歩も動けなくなりました。祖母がおんぶして帰ろうにも、私は微動だにすることができませんでした。祖母は「これでは家まで帰れない」と思い、知人の家に行ったん引き返し、その日は私だけそこに泊めてもらうことにしました。その知人は、祖母とはとても親しい間柄だったので、無理をして自宅に帰るより、いっそ泊めてもらうほうがいいと判断したのです。

この知人の家こそ、私がこのあと二十数年にわたり、全身全霊をもって仕えることになる師匠、勝森恵えしん心先生のご自宅でした。

私が宿泊したその夜、勝森先生は不思議な夢を見たそうです。私が赤い数珠を持ち、棺桶に入っていた、とおっしゃるのです。

翌朝、早朝だというのに、勝森先生が私の両親と祖母を訪ねて来られました。そして「和子さんの命を助けたいから、私に預らせてほしい」と申し出られたのです。

いきなりの申し出に、両親も祖母も驚きと戸惑いを隠せませんでした。何しろ私は、家族のもつで大切に育てられていたので、自宅から離れて暮らしたことなど一度もありません。

ですが家族は、私の成長が人より遅く、医師にすら「早死にする」と宣告された子どもであることに心を痛めていました。ですから、勝森先生の「命を助ける」という言葉にすがりついたのです。この子が助かるのなら、どんなことでもする。そんな覚悟にも似た気持ちだったのでしよう。

そうして、私は小学五年生にして、つらく厳しい「行」<sup>ぎょう</sup>の道へと踏み出すことになったのです。

一週間後、私は家族とともに、妙見宗総本山の本瀧寺に入山することが決まりました。



た。そのとき「なぜみんな山へ行くの？」と少し疑問に思いましたが、家族が行くなら自分も行く、という軽い気持ちで、昭和二十八年八月二十八日、生まれて初めて、妙見山の奥深くにたたずむ本瀧寺へと向かったのです。

入山の日、家族や勝森先生の信仰仲間にも囲まれ、私はハイキングのような気分で本瀧寺へと登りました。家族といっしょの登山という感覚で、とても楽しかったのを覚えていています。

しかし、夕方になって、その楽しさは一変しました。家族は私を残して、先に下山してしまったのです。「行」は勝森先生と私とだけで行うものなので、それ以外の人には下山しなければならなかったのです。

それは私にとって、荒波が狂う嵐の海に一人投げ出されたのと同じことでした。それまで私は、「体に悪いから、神経を使うことは一切やらないでよい」という祖母や両親のもとで保護されるように生活してきました。一人ぼっちにされたことはもちろん、人里離れた山中に置き去りにされることなど、あり得ませんでした。



だか理屈抜きに「師匠の言葉は、神からの言葉だ」と感じたのです。

妙見山は神々しく、何か大きなものが宿っていることを感じずにはいられませんでしたが。様々な人が手を合わせ、一心に拝む姿を見て、子どもながらに、この地が信仰の地であることを肌身で感じていたのです。

体を滝に打たれ、お百度を踏み、質素な食事で空腹をしのぐ日々。ですがそのおかげで、私は「食べ物の大切さ」を身をもって学ぶことができました。自宅で食事をしているとき、妹がじゃこの頭をぼろっと床に落としたのを見て、「もつたいない」とあわてて食卓の下にもぐり、じゃこの頭を食べたのをいまでも覚えています。それくらい、あたたかいごはんを食べられる有り難さが身に染みついていたのです。

しかし、何にも増して身に染み、つらさを味わうことになったのは、早朝のお滝の行や食事のことではなく、精神をいじめにいじめ抜く「心の行ぎょう」でした。心の行は、他人から見れば過酷極まりない体験です。まるで師匠によって虐げられているように

見えたと思いますが、それは、師匠が私に与えてくれる「尊い試練」そのものでした。それが分かるのはずっとあとのことですが、このころはそんなことに気づくはずもなく、私は二十年にわたって、「なぜ…」と思うほどの心の葛藤に耐えることになります。

勝森先生は、当時三十代でしたが、私は先生のことを「おぼちゃん」と呼んでいました。祖母の知り合いの優しいおぼさんだと思い、親しみをこめてそう呼んでいたのです。しかし、行が始まった瞬間から、勝森先生の態度が豹変したのです。

ある朝、いつものように早朝のお滝の行に出かけようとすると、勝森先生が「疲れているだろうから、今日はゆっくり寝ていいよ」と声をかけてくれました。私はその言葉に甘えてゆっくり眠ってしようとしたところ、五分も経たぬうちに勝森先生が起き出し、身支度を整えてお滝場へ向かったのです。びっくりした私は、自分も慌てて起き上がって着替え、先生の後を追うようにお滝場へと向かいました。

お滝場に着いた私を、先生は鬼のような形相で迎えました。そして「何のために山に来ているんだ！」と激しく叱りつけました。

怒られた私は、ハッとしました。自分はこの行に来ているのだ、そして、師匠である勝森先生の言葉には、どんなに理不尽であっても、絶対に従うべきものなのだ、ということに気づいたので。

私は心から反省し、涙を流しながら手について「自分が悪かったです」と勝森先生に謝りました。まだ小学五年生の子どもでしたが、とにかく先生に平謝りに謝りました。

勝森先生からは、同じような叱責がたびたび浴びせられました。右を向けと言われて右を向いたら怒られる、身に覚えのないことで叱られる。そんな、常識では考えられないようなことが、何度となく繰り返されたのです。

それでも私は「勝森先生について行こう」と固く心に決めていました。子どものいなかっただ先生は、普段は私をわが子のように可愛がってくれましたが、行になると人が変わり、鬼のように厳しく私をしごきました。でも、行を通して、私の命を救ってくれる人だと思っていましたし、何より、「神様が必ず見ていてくださる」と信じて

いました。どんなにつらくても苦しくても、神様はいつも自分を見守り、導いてくださる。その思いが、過酷な行を耐え抜く原動力となりました。

もう一つの救いは、「滝行の神様」と言われる西本妙修法尼の励ましでした。西本先生は、勝森先生の気性をよくご存知で、私が受けていた心の苦しみを分かってくれていたのです。陰になり日なたとなって、私たち親子を激励してくれた西本先生のお心遣いが、つらさの中に灯る小さな灯明でした。

行は、月に一回、一週間ずつ行われ、私はその都度、泊まり込みで入山しました。冬の寒行や夏の土用の行には、十二日間泊まり込み、これを約十年間続けました。ときには、父や母、祖母が行に同行することもありました。でも、親がいる前であつても、勝森先生の厳しさは全く変わりませんでした。いったん入山すると、母の目の前で鋭い言葉を使って叱つたり、家庭環境に対して辛辣な言葉を浴びせるなど、本当に心が苦しくなることばかりでした。

あまりの仕打ちに、母といっしょに涙を流したことも一度や二度ではありません。画家で気が短かった父は、涙を流す代わりに、勝森先生に抗議しようとしたこともありました。でも私は、そんな父に「私がかわいかったら、何があっても師匠の言うことを聞いてほしい」と頼み込みました。どんなにつらいことがあるとも、私はこの先生に仕えるのだ、という信念にも似た気持ちがあつたからです。

家族は、そんな私を物心両面で支えてくれました。入山するには、食糧や日用品など、生活に必要なものをすべて持って行かねばなりません。そのため、かなりの出費となっていたのですが、その費用を、私の両親は私財を投じて捻出してくれました。また、祖母と母が交替で行に同行してくれて、身の回りの世話を引き受けてくれました。私には二つ年の離れた妹がいますが、妹も私のために様々な我慢をしてくれました。家族が身を粉にして尽くしてくれるという協力なくして、私は行を続けることはできなかつたでしょう。

特に両親は、勝森先生による様々な言動によって、とてもつらい思いをしたと思い

ます。まわりの人に誤解され、大勢の人の前でプライドを傷つけられ、勝森先生の気性の激しさに振り回されながらも、私のためにじっと耐え抜いてくれました。

ある日、私は自宅の縁側に座り、中庭を見ながら、行のつらさに耐えきれずポロリと涙をこぼしたことがあります。それを見ていた家族の心中は、いかばかりだったでしょう。でも、だからといって、それを勝森先生に告げることなどできません。

両親は、物やお金だけでなく、自分の心まで投げ打ち、神様に認められるくらいの辛抱をしてくれました。それは、わが子の命を助けてくれたことに報いる「心を差し出している恩返し」でした。そのときの両親の心中を思うと、いまでも涙がこぼれてきます。

何度も行に身をゆだねているうち、私はだんだんと、神様を身近に意識するようになりました。冬の厳しい寒さが続く季節は、さすがの勝森先生ですら「今日はお滝に行くのをやめようか」とためらうほどでしたが、私はそんな先生を引っ張ってまで滝



に出かけました。幼いころから培われた芯の強さは、こうしたところでも発揮されたのです。

私が先生を引つ張つてお滝に入る様子を見たまわりの方々は、まるで先生と弟子の立場が逆転したかのように見えたのでしよう。そのうち私は、「小先生」というあだ名で呼ばれるようになりました。

そこまでして行をしたかったのは、「神様に借金をしたくない」という一念からです。お滝の行には一日三回行っていたので、一日行を休んでしまうと、休んだ三回分を取り戻すため、翌日には六回行かなければなりません。二日休めば九回、というように、休んだ分は翌日へと持ち越されます。私は「これは神様への借金だ」と思っていました。だから、毎日休むことなく、一心に行を続けたのです。

神を信じる心が芽生え、前向きに行に打ち込む私へと変わっていった中学生時代、ご先祖様の因縁が、私に語りかけてくるという出来事がありました。

ある日、大きなお腹をした尼僧の霊が出てきて、涙ながらに自分の身に起こった悲しい出来事を話し始めました。聞けば、私の何代か前の先祖との間に子どもができたものの、結婚することもなく、悲しい人生を歩んだと涙ながらに語るのです。その傷ついた気持ちに、私はたまらなくなり、涙がポロポロとこぼれてきました。

そしてその女性に「どうしたら過去の過ちを許してもらえるでしょうか」と問いかれました。すると女性は「三年間、行着ぎようぎを着て学校へ通ってほしい」と訴えました。

多感な中学生時代、行着を着て学校へ通うなど、恥ずかしくてとてもできないことでした。制服を着ている友達の中に、一人真っ白な行着を着た自分がいるなど、想像しただけではばかられました。しかしその時の私は、何のためらいもなく「はい」と返事をしたのです。自分の先祖が犯した罪を償い、悲しみにくれる女性の霊をおなぐさめたい、という気持ちでいっぱいだったのです。

私が迷うことなく訴えを聞き入れたのを見て、女性の霊は安堵したように「そう言ってくれてうれしい。行着を着て学校に通わなくてもいい。その代わり、行着を着て毎

日手を合わせて拝んでくれれば、それでいい」と言って消え去りました。

霊は、形ではなく、人の「心」をとらえます。このとき霊は、私の「本当に申し訳なかつた」という気持ちに触れ、許してくれたのでしよう。私は言われた通り、毎日欠かすことなく、女性のために拝みました。

先祖の犯した罪、業のために、いまだ救われず、苦しみの中にある魂に出会ったとき、胸が潰れるような思いがします。しかし、そんな魂を少しでもお救いするため、手厚い供養を重ねることができるとは、ほかでもない、生きている現世の私たちだけなのです。

この世に生きる私たちのためだけではなく、自分を生んでくれた両親、さらにはそのご先祖様を敬い、周囲の方々のためにご供養をする。それが、前世に不幸を受けた霊をどれだけ喜ばせ、安らぎへとお導きすることができるか。あの尼僧の霊は、私にそのことを教えてくれたように思います。

第三章

天啓



高校生になっても、行の日々は続きました。寒行と土用の行には、学校を休んで行きま  
したし、学校から帰ったあとは、百日間、毎日欠かさず、「一万遍のお題目」を唱えました。  
唱えるのには一回につき四〜五時間は必要ですので、眠るのはいつも深夜です。気力、体  
力ともにぎりぎりでした。

特に寒行は過酷で、大人の背丈を超える雪が積もる中で、どうと流れる滝に打たれま  
した。お滝の行が終わったあとも、勝森先生から薪の火に当たることを禁じられていた  
ので、体が濡れたまま、お百度を踏みました。でも、滝の水を「冷たい」と思ったことはあ  
りませんでした。

気がついたら、髪の毛からツララが下がっていたこともたびたびあります。体中があ  
かぎれになり、寒行が終了し、夜に熱いお風呂に入ると、あかぎれの体に鋭い激痛が走る  
ので、湯につかることもできず、ほとんど水に近い湯船にしかつかることができません  
でした。体はつらかったのですが、それを苦痛と思わないくらい、私は行にのめりこみ、  
没頭していたのです。

そんな私に、ある不思議なことが起こりました。高校二年生の冬、ちょうど十日間にわたる長い寒行に入っていたときのことでした。

いつものように、冷たい冬の山道を踏みしめながらお百度を踏んでいたところ、杖をついた一人のおじいさんが、私のほうに向かってニコニコと笑いながら近づいてきました。そして、私の前で立ち止まりました。ですが、私はお百度の最中でしたので、拜むことに集中し、ふとおじいさんのほうに視線を戻したとき、もうそこには誰もいませんでした。

また、夜の暗いほこらに入り、拜んでいたときも、やはり何もないところからおじいさんが出てきて、私に近づいてきました。でも、前と同じように、気がついたら姿が消えていました。

私がほこらから戻り、「こんなことがあった」という話をすると、周囲の大人たちはみな一様に驚きました。「それは本灌寺のご守護神、常富様だよ。まだ子どもなのに常富様に会えるなんて、すごいねえ」と口々に言われたのです。

常富様は、霊験あらたかなことで知られる神様です。その姿は、長い白髪に白い髭を生

やされ、右手には杖、左手には宝珠を持つておられます。私がほこらで見た、あのおじいさんとまったく同じ格好なのです。

常富様の眼通力を授かろうと、一般の方はもとより、有名人までもが行に通つておられますが、なかなかその力にあやかるとはできません。そんな中、私は高校二年生という若さで、常富様のお姿を見ることができたのです。

なぜ、私は常富様を見ることができたのでしょうか。それは、ただ無心に、ひたすら行に打ち込んでいたからだと思います。ほかの大人たちが眼通力欲しきに行に通つていたのに比べて、私は、そんな能力が欲しいなどはまったく思つていませんでした。ただ行に打ち込むこと以外、何もなかったのです。

無心とは、欲がない状態、すなわち「無欲にものごとに打ち込む」ことを言います。行をすることによつて、眼通力がほしい、特別な能力を授かりたい、と見返りを求めている状態は、無心とは言いません。自分のほしいものを手に入れたいという欲があるからです。

ただただ無欲に、「ありがたい」という気持ちを持つて行をする。これが無心です。私



は、無欲にまざる徳分はない、と思つています。見返りを求めて行をしたりお参りをしたりするのはなく、欲を持たず、ひたすら手を合わせ、信仰に励んだとき、大きな徳分がもたらされるのです。

ただし、抱いてよい欲もあります。それは、世の中のためになる帰依きえと布施ふせの心です。誰かを助けたい、世間の役に立ちたいという欲は、向上心と努力する心を生み、自分を高めてくれます。持つてはいけぬ欲は、自分だけがいい思いをしようという「我欲」なのです。

学生時代の私は、とても明るく、ケラケラとよく笑う子どもでした。勉強は、神経を使うからという理由で、それほどやっていませんでしたが、なぜか成績は良かったのを覚えていません。でも、クラスで一番の子にはどうしても勝てませんでした。

しかしなぜだか、試験の前になると、クラスメイトたちは、クラスで一番の子のところではなく、私の机のまわりに集まり「勉強を教えてほしい」と言うのです。「なぜ私のと

ころに来るの？」と聞くと「あなたの教え方が分かりやすいから」とどの子も答えてくれました。勉強以外にも、恋愛の相談に乗ったり、悩みを聞いたり、何かと頼られたものです。

しかし、そんな明るい学校生活とは逆に、行まわに入れば、私は勝森先生の厳しい言動に振り回され、黒を白と言わなければならないような精神の苦痛に耐えていました。それなのに、なぜクラスメイトから慕われるような明るい少女に育ったのかといえば、それはやはり、私を心から愛し、影からあたたかく見守ってくれた両親や祖母、妹の存在があったからです。

寒行で入山するとき、私はいつも大荷物を抱えて山に上がりました。着替えや食べ物など、すべて持っていかなければならないからです。冬はいつも大雪が降り、バスを始め、すべての公共交通機関がストップしたため、麓から歩いて山に向かわなければなりませんでした。その大荷物を、私、母、祖母とで交代で抱えました。大きくなつてからは、妹も荷物を持つ役目を引き受けてくれました。家族に愛されている、支えられていると

いう実感が、私をまっすぐに育ててくれたのだと思います。

一方で、つらい思いもあります。高校を卒業するとき、先生方の間で、「和子さんは体が弱いのに、よくこれだけ学校生活をがんばった。成績はトップではないが、何か賞をあげることはできないか」という話が持ち上がったそうです。しかし、それに反対したのが、私の担任の先生でした。

先生は「体が弱い子は、団体行動にも加わるべきではない」と、賞の授与を阻んだのです。その先生は、体が弱い子だけでなく、貧しい子にも冷たい態度をとっていました。成績優秀で元気な子にはいい顔をするのですが、そうでない子には「学校にいるべきではない」という考えをお持ちだったようです。

担任の先生の反対によつて、私は賞をいただくことができませんでした。このときの経験によつて、私は「人を健康や貧富の差によつて区別するようなことがあってはならない。どんな人にも、等しく接しなければならぬ」という気持ちを強く持つようになりました。

お金があってもなくても、五体満足でも体が不自由でも、すべての人に平等であることの大切さを、自分が差別されることで知ったのです。あのころのことを思い出すと、いまでも悔しいのですが、つらい体験を通し、こうした気づきを与えてくださったのも、私がこのあと、期せずして人を救う道に入っていくための、神のお導きではなかったかと思っております。

私にとって最大の人生の転機が訪れたのは、高校を卒業し、社会人となって数年が経ったころでした。私は相変わらず行に通いながらも、一人の女性として嫁入り準備を始めました。同じ年頃の若い人たちが集まる会に入り、遊びに行ったり、ピクニックやダンスホールに出かけたりと、青春を思い切り楽しんでいました。

そして二十歳を迎えた昭和三十七年に、私は晴れて得度いたしました。得度とは、迷いの世界から悟りの世界へと一步を踏み出し、信仰の道を歩み続けるという「誓い」を立てることです。このとき、私は「妙浄みょうじょう」という法名をいただき、加持祈祷の資格を正式に

授けられました。

得度のとき、私は、神仏に命を助けていただいたことに感謝し、「これからも、信仰を中断せず、ずっと続けていこう」と心に誓いました。しかし、この道を極めるつもりはなく、開祖として立ち、人を救うことを仕事にしようなどとは夢にも思っていませんでした。

成人してからの三年間は、洋裁学校に通いながら、嫁入り衣装を自分の手で縫ったり、自宅の家事手伝いをしながら過ごしていました。普通の若い女性と同じように、お見合いをし、結婚に希望を抱きながら過ごしていました。誰かのもとに嫁ぎ、子どもを産み、主婦として暮らすことが、女性として幸せな人生だと思っていたのです。

しかし、二十四歳になったばかりのとき、そんな私の人生を百八十度変える大きな出来事が起こったのです。

昭和四十年十月二十八日。私はこの日を、一生忘れることはありません。

いつものように家の掃除をし、アイロンをかけ、家族の昼食を準備するなど、私は何の

変哲もない平凡な一日を過ごしていました。

ちょうど、父の友人である中村靈道先生がおいでになっておられました。中村先生はのちに、勝森先生と並び、私の師匠とられる方ですが、このときはまだお仕えしておらず、私にとっては信仰の大先輩といった立場の方でした。

とてもお酒が好きで、私の自宅に来られるたびに、何日かわが家に泊まられ、父と盃を酌み交わしていました。この日もたくさんお酒を楽しまれていたため、お帰りになる日、予定の時間になっても帰ることができず、わが家ですつと休んでおられました。

異変が起こったのは、昼食が終わったあとのことでした。それまでは何ともなかったのに、私の体が急に変調をきたし、全身が苦しくなってきたのです。周囲で見ていた家族は、突然のことに「何が起こったのか」と半ば呆然としていました。

私の身に、病とは別の、何か尋常でないことが起こったのを察した母は、「ちょうど中村先生がおられるから、押んでもらってはどうか」と言いました。しかし私は、「自分には勝森先生という師匠がおられる。別の先生に押んでいただくのは筋が通らない」と丁重

にお断りしました。私にとって、命を救っていただいた師匠は勝森先生ただ一人であり、天地がひっくり返ろうとも、その恩を忘れてはならない存在だからです。

「恩」は、返そうとしても返しきれないものです。一方「義理」は、お返しすればご破算になります。私は勝森先生に、義理ではなく恩を感じていたので、どんなにつらい思いをしようとも、勝森先生を立てなければならぬと固く誓っていました。

しかし、苦しみはどんどん増すばかりで、一向に良くなりません。家族が心配そうに見守る中、苦しむ私をこれ以上放っておくわけにはいかず、とうとう、中村先生が傍らで祈祷を始めました。ところが、祈祷を行う中村先生まで苦しくなり始めたのです。

苦しみ始めてどのくらいが経ったでしょう。中村先生の読経のもとで、ふいに私に異変が起きました。体が天へ向かって昇り始めたのです。とはいえ、私の姿体は畳の上で手を合わせて正座したままです。意識がはつきりとある中、魂だけが天へと舞い上がっていたのです。

私は、天井をまるで薄紙を破るがごとく、両手の指でやすやすと突き破りました。続いて、大屋根の瓦を和紙のごとく突き破りました。家の外へと出た魂はどんどん浮上していき、やがて上空の雲の広がる空へと上って行きました。それでもまだ私の魂は、天へ、天へと向かっていきます。

雲海を抜け、雲の上にある真っ青な空を通り過ぎ、魂は天空をひたすらに上がっていきます。そしてたどり着いたのは、口では何とも言い表せないような、神秘的で不思議な色をした世界でした。

私の魂が天上へ行き着いたのと時を同じくして、地上にある私の姿体が、傍らに集まる家族や中村先生に、思いもよらない言葉を口走り始めたのです。意識はあるのに、私の意志とは違う言葉が口をついて出てきたのです。それはまるで、天上にいるとてつもなく大きな存在が、地上にいる小さな蟻にものを言うがごとく、威厳に満ちたものでした。

その言葉は、私の口を借りた、神から私の家族へ向けての言葉だったのです。



よくぞここまで育ててくれた。

この世の者を救うため、

この者を母親の胎内へ宿した。

今日からこの者は、神が使う。

神は、家族に対して感謝を述べたのち、次のような言葉を告げました。

この者には、今日から、

「人を見抜く力」と、

「病を治す力」を与える。

啓示が終わったあと、私はふと我に返りました。魂は天界にありながら、姿体と意識は、またもとの状態に戻ったのです。私の祖母は、その様子を見て「神様に孫をとられて

しまう」と涙を流したそうです。

これが、私が天啓を受けた瞬間です。

天啓を受けると、魂は天界にありながら、意識と体はこの世にあり続けます。天から与えられた使命を全うするために、私は自分の意識と肉体を使って、世の人を救うために尽くすのです。

天啓以来、私の人生観、考え方はガラリと変わりました。天啓を受ける数分前までは、普通の女性として生きていきたくて思っていました。天啓と同時に、次のような使命感がふつふつと湧き上がってきました。

「私は、人を救うためにこの世に生まれてきたのだ。残りの人生すべてを人の救済に費やそう」

それまでは信仰の道を極めるつもりなど少しもありませんでしたが、その心根も様変わりしていました。私はそれまでの行ぎょうの中で、信仰の道を極めれば極めるほど、食べてい

くのが難しくなることを目の当たりにしてきました。また、ごく一部ではありますが、人を救う力が十分に備わっていないのに、傲慢な態度をとる人、お金や地位のある人にすり寄り人などを見てきました。ですから、ちよつとした反発心から、自分はそんな世界には足を踏み入れないと心に決めていたのです。

ところが天啓後は、そうした考えをはるかに超越した「人を救う道に生きる」という強い思いがわいてきたのです。

あれほどこだわっていた結婚への願望も、跡形もなく消え去っていました。自分の幸せよりも、人を救うことに全力を注ぎたいという考え方に変わったのです。

天啓からまもなく、私はこつこつ準備してきた嫁入り道具をすべて整理しました。お見合いもダンスパーティーも、すべて過去のものでした。人間がまるごと生まれ変わったように、私の心は、神の使いとしての人生を歩む方向に変わったのです。これからは、遊びや楽しみをいっさい断ち切り、寝る間も惜しんで修行しよう。その一念のみが、心を占めていました。

これが、信仰の道をひたすら歩む「開祖としての人生」がスタートした瞬間です。私にとっては、新しく生まれ変わったかのような、人生の再出発でした。

天啓を受けてからというものの、私には不思議な靈感が湧き起りました。周囲が驚愕するようなことを、次々と巻き起こすようになったのです。

天啓を受けた直後、結婚が決まっていた高校時代の友人が、たまたま自宅に遊びに来たのですが、私はその女友達に「これからはもう遊んでいるヒマはないから、最後に、お互いの新しい門出を記念して、二泊三日の旅行に出かけよう」と告げました。その旅行の最中、私は早くも法力を発揮したのです。

旅の途中、私は友達に何気なく「あなたの結婚の日取りが少し遅れるよ」と伝えました。あまりに唐突な言葉に友達はびっくりし、「まさか……」とただただ面食らっていました。しかし、旅行から帰ってしばらくのちに、私の言葉が的中したのです。両家の事情によって、なんと本当に、結婚が三カ月延期されたのです。

ほかにも、次々と不思議なことを口にするようになりました。ある日の午後、お客様が自宅に見えるというので、午前中、母が買い物に行くと言うと、「今日はお客様は来ないから、買い物に行かなくていい」と母を引き止めました。すると、本当にその通りになり、来客の予定がなくなりました。また別の日には、家の銀行口座にお金が振り込まれることを一時間前に言い当てるなど、未来を予言するかのようなことが繰り返して起こるようになりました。

天啓のとき、私は神から「人を見抜く力」と「病を治す力」を授かりました。将来起こることを言い当てたり、予言めいたことを口にするのは、このうちの「人を見抜く力」に由来するものです。

もうひとつの「病を治す力」ですが、これはこの先、私が多くの人をお救いするのになくてはならない法力でした。その力がどういふものであるかは、私がこれまで数え切れないほど経験してきた命を取り留めた方々のお話の中で語っていきたいと思います。

第四章

人を救う仕事へ



天啓を受けてからというものの、私は病気で余命幾ばくもないと言われた方、人生のどん底で苦しんでいる方々を、神から授かった力でお救いすることに励みました。それを「自分の仕事」とし、人生をかけて取り組むようになったのです。

天啓の神は、その後、名前の啓示によつて「秋津天御親太御魂大神」あきつあまみおやふとみたまのおおみかみであることが分かりました。秋津天御親太御魂大神は、物事を中心、根本を司り、幸福を生み出す神です。この幸福を生む力こそが「大円通力」だいえんつうりき。その力は無限にあり、求めれば求めるほど、限りなく幸せをもたらしてくれるのです。

私は、天啓の翌年である昭和四十一年、この神を勧請し、信仰の場として、自宅を道場としました。太魂院の前身となる出発点が、ここに誕生したのです。

道場を開き、行に打ち込んでいたある日、私のもとに、救いを求める一家がやってこられました。連絡してこられたのは、私とは以前から関わりのある方で、私が名付け親を務めさせていただいた赤ちゃんのご両親でした。聞けば、その赤ちゃんが重い



病にかかり、病院で「余命一週間」と宣告されたとのことでした。

そのとき私は、行をおこなうため、福知山に滞在している最中でした。福知山には、天啓の時に読経してくださった中村先生の道場がありました。私は天啓以来、中村先生を「第二の師匠」としてあがめ、お仕えるために月に一度、一週間の行に通っていました。

その日も福知山で行に励んでいたのですが、私が不在であることを知っても、赤ちゃんのご両親は、いても立ってもいられなかったのでしょうか。わが子を救いたいという一心で、「退院させたら大変なことになる」と猛反対する医師と大げんかして、大病院を退院し、私が大阪に帰るのを待つておられたのです。

行を終えて帰宅すると、夜十時になっていましたが、一刻も早く赤ちゃんを救わなければならぬという気持ちでいっぱいでした。

赤ちゃんが本当に病気であるなら、薬などを使って、病院できちんと治療してもらわなければなりません。しかし、病気以外の何かが赤ちゃんを苦しめているのなら、

むしろ、病院でどんな治療をしても、治すことはできません。

私はさっそくご両親と赤ちゃんにお会いし、すぐさま神にお願いをかけることにしました。そのころはまだ、一軒一軒のお宅にうかがい、ご自宅でご祈祷をしていました。私は赤ちゃんのもとに一週間通い詰め、「命を救わなければ」という一心で拝みました。赤ちゃんは最初、白い着物を着た私にびっくりし、火が付いたように泣き出しました。大病院にいた時に見た白衣の医師や看護師と、私とを見間違えたのです。赤ちゃんは、病院で検査や治療のために、小さな体に幾度となく注射の針を入れられ、たくさん痛い思いをしてきたのでしょう。そのため、白衣に恐怖心を覚えたのです。

夜八時に道場を出て、十時に赤ちゃんのご自宅に着くという毎日が続きました。祈祷の最中、赤ちゃんは何度も容態が急変し、顔面蒼白になり、見た目にも命の危機を感じるくらい危険な状態に陥りました。それは、赤ちゃんの家族にまつわる、強い因縁によるものでした。手、足、口、耳の色まで青く変わり、泣くことも目を開けることもしません。懸命に祈祷を続けながらも、私は「この子はそのまま命を落としてし

まうのではないか」という、言いしれぬ恐怖に襲われました。人の命の瀬戸際に直面する恐ろしさを、目の当たりにしたのです。

まるで死の淵に引つ張られるがごとく、ただただ蒼白になる赤ちゃんを目の前にし、一瞬たりとも気が休まることはありませんでした。私は一週間、自分の命がすれすれになるくらいまで祈りました。そして、祈祷が終わるころは、身も心もくたくたになっていました。

しかし、私を通っているうち、赤ちゃんは小さいなりに「この人は自分を救ってくれる」と思ったのでしょう。また、その無垢な心で、神仏を素直に受け入れ、信じたのです。赤ちゃんは日が経つにつれて、夜中に容態が急変しなくなり、余命と言われた一週間が過ぎたころ、とうとう、その小さな命を取り留めました。大病院でも「手の施しようがない。いま退院したら確実に死ぬ」とまで言われたのですが、無事、生還したのです。

喜んだのはご両親です。「こんなにうれしいことはありません」と、何度も頭を下

げられました。晴れやかなご両親の表情と、元気を取り戻した赤ちゃんの様子を見て、私は心底「良かった」と思いました。神の法力をもって人をお救いできることに、心から感謝しました。

ご両親はそんな私に、「いまの私たちができる、精一杯のお礼です」と、一万円を包んで持ってきてくださいました。ご両親は、大病院での治療費に貯金をすべて使い切り、手元にはほとんどお金が残っていませんでした。つまり、その一万円は、ご両親にとって、全財産にも等しいお金だったのです。

私は、ご両親のお気持ちに非常にありがたく思いながら、「いえ、お礼は結構ですよ」とお伝えしました。なぜなら、命を助けた見返りが欲しいとは、少しも考えていなかったからです。

天啓と同時に、私は、苦しみにあえぐ人を助けるといふ、天からの使命を授かりました。ですから、その使命を果たすことだけで頭が一杯だったのです。しかしご両親は「これほど幸せなことはないのだから、どうぞお受け取りください」と、尊い一万

円を置いて帰られました。

道場を開いて以来、それまで私は一度も金銭を受け取ったことがありませんでしたので、思えば、このときのお金が、私が初めていただいた「人を救ったことへのお礼」でした。

人を助けることを自分の仕事とし、目の前にいる方々をお救いするようになって以来、私のもとには、さまざまな方がいらっしやるようになりました。

ある年のお正月、小学生の子どもを持つお母さんが、「おかしな初夢を見た」と私に相談を持ちかけられました。海で泳いでいるわが子が、モーターボートの事故に遭う夢を見たというのです。私はお母さんに「水難の相が出ているから、気をつけてあげてください」とお伝えしました。お母さんは半信半疑ながらも神を信じ、一所懸命に手を合わせておられました。

その年の八月、夢の出来事が現実となりました。海で遊んでいるお子さんのところ

に、モーターボートが突っ込んだそうです。海の色、空の雲の模様まで、夢で見た通りの光景だったそうです。しかし、私がお伝えした通り、水難を逃れるため、さまざまなことをしておられたので、お子さんの着ているものがモーターボートに引つかかって流されただけで、大事には至らなかったとのことでした。命が流される代わりに、服が流されたのです。

またあるときは、中学受験を控えた子のお母さんが、「人づてに聞いた」と言っ、私のもとを訪ねられました。お子さんが病気にかかり、医師から「命が危ない。受験どころではない」と告げられ、悲嘆にくれておられました。どうやら、周囲の人から「あそこに行けば助かるかもしれない」と私を紹介されたようでした。

このとき私は、お子さん本人に、子どもでもできる供養の方法をお教えしました。「三日間、それをやり続けてね」というと、お子さんは本当にその通りにしてくれて、たった三日のうちに、病はきれいに癒えたのです。

こんなこともありました。友人の知り合いが、「実家にいる母の胃ガンが再発し、余命一カ月と宣告された」と沈んだ様子で相談してこられました。女性のお母様は、まだ五十二歳という若さでした。

後日、お母様のご主人に来ていただき、詳しい話を聞いていた私は、ふとこう聞きました。

「以前、そちらではお地藏様を祀っておられませんでしたか」

これを聞いて、ご主人は「なぜ分かったのか」と非常にびっくりされました。女性の一家は四十年前、家族そろって奈良の村から大阪に移り住まれたのですが、奈良の自宅を出るとき、祀っていたお地藏様を放りっぱなしにしてきたと言います。これが原因で、病という形で知らされていたのです。

ご主人とともに、私もすぐさま奈良へ飛び、以前住んでいた村の家に行ってみると、まわりは草がぼうぼうに生え、住まいは朽ち果てていました。しかし、草をかき分け、道なき道を進んで探してみると、お地藏様はちゃんとそこにいらっしやっただのです。

幸いなことに、村の人たちが「こうやって出てきてくださったのだから、村の守り本尊にする」と言い、お地藏様を勧請し、手厚く祀ってくださいました。その直後、女性のお母様の胃ガンは治り、命を取り留めたのです。

実は、私がお母様を病からお救いするため、ご自宅に拝みに行っていたとき、主治医のお医者様も来られていました。あとでお母様に聞いたところ、そのお医者様は私のことを「あなたを助けたのは、いつもいらしていたあの方ですね」というふうにおっしゃっていたそうです。

お母様はその後、八十二歳まで長生きされました。

名古屋から二十代の義理の息子が、心臓発作のような状態になった。助けてほしい」という電話がかかってきたこともありました。私がお願いをかけたところ、それとまったく同時刻、遠く名古屋にいる義理の息子さんの痛みが消えた、という例もあります。病が治っただけでなく、長年の悩みから解き放たれた例もあります。



適齢期を迎えた中学時代の友人が、あるとき私を訪ね、思い詰めた様子で「私は結婚できない」と告白しました。婦人科系の病気の症状が出ていたのですが、恥ずかしくて病院にも行けず、一人で悩んでいました。

私は彼女を見て、「犬の霊がついている」と伝えました。友人が帰宅して家族に詳しく聞いたところ、友人の父親が犬を殺したことが初めて分かりました。きちんと飼養をしたところ、友人の病は完治し、やがて恋愛結婚しました。いまでは社長夫人として、幸せに暮らしています。

ほかに、本当にたくさんのお出来事がありました。結婚して八年、なかなか子どもができないご夫婦が、「姉の子をもらおうか」と思案しておられたことがありました。でも私は「いくら自分の子として育てるといつても、それは大変なことだ。必ず子どもができるから、もう少し待ってみてください」とお伝えしました。すると、奥様は間もなく身ごもり、その後、男の子と女の子を一人ずつ出産しました。

このほかに、自分たちに子どもができなかつたばかりか、養子に迎えたお子さんもまた、結婚して五年経っても子どもができない、というご夫婦にも会いました。高にお金を出して体外受精に挑戦しても、失敗に終わったとのこと。しかし、ご夫婦に供養の方法をお教えしたところ、すぐに赤ちゃんができ、現在は二人のお子さんをもうけておられます。

失恋ばかりしている女性から、毎晩のように「死にたい」と電話がかかってきたこともありました。私は女性に「必ずいい人が現れるから、思いとどまって」と説得するとともに、功德を積む方法をお教えしました。女性はいま結婚し、二人の子宝に恵まれています。

アパート住まいで、「マイホームを買うなんて夢の夢だ」と思っていた方が、一戸建てを買うことができたり、婚期が遅れていた人に「間もなく結婚できる」とお伝えしたら、すぐに縁談が決まったり。そんなことが、立て続けにありました。

また、なかなか入れなかった大学に、見事合格した、という例もありました。大阪でも有数の名門高校でトップの成績を誇り、学校の先生に太鼓判を押され、いろいろな大学に合格するものの、なぜか第一志望の医学部だけは受からない、という方がいました。この方は、徳分がなかったせいで、どんなに勉強しても志望大学に受からなかったのです。

あるとき、受験のことで、私のところに「今年は合格するでしょうか？」と聞きに来られたことがありました。「今年も無理です」とお答えすると、どうしたら合格できるのかと相談されました。そこで私は、ご両親に「徳分をつけてあげてほしい」とお伝えし、功德の積み方をお教えしました。すると、翌年には見事に合格されました。このようなことがたくさんあり、看板も出していないのに、口伝えに私のことが広まり、その後も多くの方々が、私のところに救いを求めてやって来るようになったのです。

第五章

縁あつて



人は皆、ご縁があつて出会います。魂は天上にありながら、この世にある心と体を使って人を救う私もまた、たくさんのご縁をいただいています。縁を信じ、縁を大切にし、相手のために尽くせば、それは必ず人の人生を切り開いてくれます。生きる氣力を失った人でさえ、再び勇氣を取り戻し、感謝と喜びの人生を送ることができのです。

とあるご縁で出会い、相手を信じ、尽くし切ったおかげで、絶望の淵を乗り越えた人のお話をさせていただくと思います。

天啓を受けてちょうど一年余り経ったころ、私のもとに一人の男性がいらつしゃいました。従業員が二百人近い会社の社長をしており、大阪・難波の真ん中に大きなビルや、たくさんの資産を持つ資産家でもありました。しかし、信頼していた部下に裏切られて、大金をかすめ取られた上、男性をだまそうと近づいてきた人たちに、財産のほとんどを奪われてしまったのです。訴訟の書類が山積みになるほど膨大な裁判を起こし、財産を取り戻そうとなさっていましたが、裁判では一度も勝つことなく、負

け続けていました。そのため男性は、苦悩のどん底に突き落とされていました。

その男性は、花岡宏幸さんという四十代の方でした。二十代の私とは親子ほども年が離れていましたが、知人に紹介されて私のもとに初めて来られたとき、これほど落ち込んでいる人がいるものだろうかと感じるくらい、落胆しておられました。自宅の道場の座敷に座ったときも、ため息ばかりついており、その様子を見ていた私の祖母が、ため息の数を数えていたくらい、人生に疲れ切っておられました。

あるとき、私と花岡さんが並んで歩いているところを見て、他の信者の方が「先生がホームレスと歩いている」とおっしゃったことがあります。花岡さんの風貌がどれほどずさんでいたか、想像がつくと思います。

人にだまされ続けていた花岡さんは、すっかり人間不信に陥っていました。花岡さんのことを真剣に考えてくれる人が、まわりにいなかったのです。こんなに悲しいことはない、と私は思いました。そして、「花岡さんをだまさない人もいることを、何とか分かってもらおう」との一念を抱き、行を通じて、花岡さんとの信頼関係を作る

ことに努力を重ねる決心をしました。花岡さんには奥様やお子さんがいましたが、誰かが親のように接し、礼儀正しい生活に導きながら、人としてのお付き合いを深めることが、まず肝心だと思っただのです。

仕事、行、そして花岡さんを救うことで、毎日がめまぐるしく過ぎていきました。しかし、どんなに忙しくても、全身全霊で花岡さんを救う気持ちは、少しも変わることはありませんでした。

そんなある日、私はある恐ろしい出来事に巻き込まれました。ご供養を行うため、私は電車に乗って、花岡さんの自宅に向かいました。その日、外は雨でした。普段なら、駅から歩いて線路を横切り、花岡さんの自宅に向かうのですが、たまたま雨だったため、タクシーに乗ることになりました。タクシーは、他の車に前後を挟まれながら走り、順調に花岡さんのところに向かっていました。

そのときです。私は突然、信じられない衝撃に襲われました。体中を砕くような大



きな力が襲いかかったのです。私は、数台の車が激しく衝突する三重事故に巻き込まれてしまったのです。

事故のあと、私は救急車で運ばれました。あとで聞いた話ですが、私が乗っていたタクシーは、前と後ろの車に押しつぶされ、車輻はぐちゃぐちゃに壊れていたそうです。中に乗っていた人が助かったとは思えないくらい、大破していたと聞きました。

私は、人が亡くなってもおかしくないような大事故に遭いながら、奇跡的に助かりました。とはいえ、体中には激痛が走り、とても動ける状態ではありませんでした。収容された病院では「二十日間は絶対安静」と告げられ、すぐに入院が決まりました。

でも、そんな状況に陥っても、私は「自宅の道場に戻らなければ」と考えていました。花岡さんを救うため、すぐにでもご供養をしたかったのです。医師は「体がつぶれたようになっていて、動けば命の保証はない」と言いました。しかし、一刻も早く大阪に帰りたかったのです。私は、安静にしていなければならぬ体を引きずるように、その日のうちに退院して帰阪しました。

戻ってすぐに、私は花岡さんの自宅で行う予定だったご供養を、自分の道場で行いました。そしてその最中、どうしてあんなひどい事故が起きたのか、分かったのです。それには、花岡さんの因縁が関係していました。花岡さんを狙った、非常に強い因縁でした。

これだけの因縁に遭いながらも命が助かったのは、神のご加護があったからだといくづく思います。それに、事故による怪我で腕すら上がらなかったのに、ご供養が終わったあとは、嘘のように腕が上がるようになったのです。回向（施餓鬼供養）の有り難さをしみじみ感じました。

そしてその二日後、私は花岡さんと金比羅参りに行く予定になっていました。本来なら、ケガのために中止するところなのですが、「ここで行かなかつたら、因縁に負けたことになる。花岡さんの人生が開けなくなる」と感じました。まだ事故の生々しい傷は癒えておらず、ほとんど気力だけで起き上がっていました。私と花岡さんは

電車に乗り、金比羅さんに向かいました。

痛みをこらえながら、元気な人でも息切れしてしまう長い階段を、心配そうに見守る花岡さんといっしょに、一段一段、自力でのぼっていきました。命がけでしたが、「私の体はどうなってもいい」という心境で、金比羅さんにお参りをしたのです。

参拝を終えた私たちは、大阪にとんぼ帰りしました。折り悪く、電車事故の影響でダイヤが乱れ、乗り込んだ列車は長いことストップしていました。ようやく動き出したものの、電車の運転手は遅れを取り戻そうと、すごいスピードで走り始めました。

私の体は悲鳴を上げ、座っていられなくなりました。そんな私を見て、花岡さんは「どうぞ私の体を下にして、横になってください」と言ってくれました。そうまでして、やっとの思いで大阪に帰り着いたとき、もう真夜中になっていました。

金比羅さんから帰った二日後、私は師匠二人と妙見山に出かけ、一週間の行<sup>ぎょう</sup>をしました。体が痛くて物が持てなかったので、妹が代わりに荷物を持って同行してくれました。全身打撲の私を見て、妹は泣きながら歩いていました。

にもかかわらず、勝森先生は、私の首のコルセットを見て、「そんな格好で山に行くつもりか」と厳しい言葉を投げかけました。またあとで詳しくお話しますが、勝森先生は、私がどんな状態にあらうと、決して慰めたり、励ましたりはしてくれなかったのです。

それでも私は、「花岡さんを救わなければ」の一念で、妙見山での行のあと、福知山の道場に出かけて一週間の行をおこないました。そして、それが終わったあとでも、五十日間の行をおこないました。

花岡さんは、その深い因縁のために、人にだまされたり傷つけられたりする運命を背負っていたのです。持っていた財産をだましとられ、多くの訴訟を起こさなければならぬ状態だったのも、そのためでした。人には、道を歩いても何一つイヤな目に遭わない人もいれば、向こうから歩いてくる人にいきなり暴力を振るわれる人もいます。花岡さんは、自分は悪いことをしていなくても、相手から一方的に痛めつけられるような定めだったため、人に裏切られ、傷つけられていたのです。

私は、「花岡さんが因縁を乗り越え、平穩無事な人生を送れますように」とお願いをかけながら、来る日も来る日も、ひたむきに行をしました。

その姿を見ていた花岡さんが、少しずつ変わり始めました。最初は「人は人をだますもの」という不信感にとりつかれていましたが、だんだんとその気持ちが和らいでいったのです。

くだます人ばかりではない。だまさない人もいる。人は信じられるものだから私はそのことを、身をもって花岡さんに示したかったです。自分の体を顧みず、命をかけて花岡さんを救おうとする人がいることを、行動で伝えたかったです。その姿を目の当たりにした花岡さんは「自分のことを心底思ってくれる人が、この世にはいる。世の中は捨てたものではない」と思い直してくれたのでしょう。

花岡さんはその後、自分が財産をだましとられたニュースになるくらい大きな詐欺事件の訴訟に、初めて勝つことができましたのです。

失意のどん底にある人には、時として、思いやりの言葉すら通じないことがあります。でも「あなたを救いたい」という気持ちは、行動によって伝えることができます。相手を思い、身をもって尽くせば、必ず心を開いてくださいます。何があってもあきらめず、行動をもって示すことの大切さを、私はこのときほど実感したことはありません。

その後、花岡さんは、行<sup>ぎょう</sup>を経て、私のもとに信者として身を置くようになりました。そして、道場のために身を捧げ、大きく貢献してくれました。



第六章

心の苦行





人を救うと同時に、私はさらなる行に励むようになりました。自分を磨き、鍛えることで、あまたの苦しみや痛みから、一人でも多くのみなさんをお救いしたかったです。振り返ってみると、このころの行が最も過酷だったような気がします。

人を救う仕事に没頭し、昼夜を問わず、夜も寝ないでさまざまな行をしました。また、毎月、福知山にある中村先生の道場を訪れ、水道もガスもないところで、井戸水をくみ、お風呂を薪でたき、炊事をしながら行に打ち込みました。

ご存知の方もいらっしゃると思いますが、福知山は、冬になればたくさん雪が積もる豪雪地帯です。道場のあった場所は、周囲に何も無い、身も凍る寒さに閉ざされる場所でした。また、道場には戸がなく、ふきさらしの中で行着一枚で過ごさねばなりません。行の準備をするため、師匠より一足早い夜一時に起きて、二時には行を始める毎日。本当に寒かったのを覚えています。

道場でお護摩をたいて、祈祷していたときのことです。火にくべられていた、薪のように太い護摩木がはげ、燃えている木片が私の足と足の間に飛んできたことがあります。

ます。しかし、お護摩に集中していた私はそれに気づかず、足をやけどしながらも拝み続けました。

祈祷が終わり、足元を見ると、太ももから煙がもうもうと上がっていました。慌てて水をかけたところ、行着や太ももの皮膚が焼けていただけでなく、座布団までもが、底が抜けて穴が開くくらい焼けたでれていました。はぜた木は、長い時間をかけて、私の身や座布団を焼いていたのです。ですが、そんな状態になっても、拜んでいるときは不思議と、熱さも痛みも感じませんでした。

このように、さまざまな肉体的な痛みを味わっていましたが、それにも増して過酷さを極めたのが、勝森先生と中村先生による心の行です。

肉体をいじめ抜く行は、やればやるほど達成感を感じ、私は満たされていきました。しかし心の行は、やればやるほどつらさが増しました。二人の師匠は、普段は非常に私を可愛がってくださいだったので、突然人が変わったような言動をとることがしばしばありました。それにお仕えするのが行だ、という気持ちで頑張り抜きましたが、

私は両師匠のもとで、これまで味わったことのない精神の葛藤を味わい尽くしました。

勝森先生は、私に大きな愛情を持たれていましたが、突然気が変わる性質があり、さつきまでとは正反対のことを言ったり、激しくののしつたりと、態度がコロコロと変わりました。そのことは、先生に仕え始めた小学五年生のときから分かっています。だが、あまりにも豹変する態度に、いつも怯えたような気持ちでいました。

私が、花岡さんの因縁のため、車の三重事故に巻き込まれて大けがをしたときも、勝森先生は、首にコルセットをしている私の姿を見て、「そんな格好で山へ行っていくつもりか」と冷たくあしらいました。あたたかなねぎらいの言葉ひとつ、かけてはくれませんでした。一緒にいた妹が、泣きながら私のコルセットを外し、体中に張った湿布をはがしてくれたことは、今でも忘れられません。

体のあちこちがつぶれたような状態になっていましたから、薪を割るにも力が入りません。それでも、食事の支度から宿坊の掃除まで、一切をやり遂げなければなりません。

せんでした。結局私は、救急車で運ばれたとき以外、まったく病院にかかることなく、行だけで体を回復させていったのです。

最もつらかったのは、両親を傷つける勝森先生の言動でした。事実ではないことを他の先生方にふれ回り、そのたびに、両親は屈辱的な立場に立たされました。勝森先生の話は根も葉もないことでしたが、何度も繰り返し言い続けると、本当になつてしまいません。事実を知らない他の先生方は、その言葉をすっかり信じておられたようでした。

しかし、本当のことを私たちの口から明かすことは、とてもできませんでした。命を救っていただいた大恩のある勝森先生に異論を唱えること自体、罪悪だと思つたのです。一度、中村先生に、勝森先生の事について相談したことがあります、「師匠のことを悪く言うなどけしからん」と叱責されました。

誰にも言えず、父も母も私も、胸が押しつぶされるような苦しみを十数年にわたって味わいました。そして、影で何度も涙を流していました。それでも私は「神は見て

いてくださる」と固く信じ、勝森先生に尽くし続けました。

事実ではないことを言われ、身に覚えのないことでののしられ、白を黒と言わなければ激怒される。家族の悪口を言われても反論すらできない。やり場のない思いで、心の中はいつもつらさでいっぱいでした。自分が間違っていたり、至らないために叱られるのなら、納得のしようがありません。しかし、先生の言われた通りに百点満点にやったとしても、次の瞬間には「違う！」と怒られ、一からやり直さなければならぬのです。

勝森先生をよく知る人は、こうした先生の気性をご存知でしたが、ごく浅いお付き合いしかない人は、勝森先生を「非常に温和でやさしい人」と思っておられました。しかし、十年以上経つてようやく、真実を語ってくださる方が現れ、初めて本当のことが周囲に知られることとなりました。山の行のとき、私たちがいつも利用していた宿の女将さんは、本当のことが分かってからというもの、「あれだけの仕打ちによ

く耐えましたね」と逆に感心してくださいました。こうして、真実がきちんと明かされていくところを見ると、やはり神はおられるのだと思います。

勝森先生が「気が変わりやすい性質」であるなら、中村先生は「野心家」でした。私を厳しく管理し、手元に置くことに躍起にされていました。

まだ若いころ、私が何か質問すると「師匠にものをたずねるなど百年早い」と突っぱねられました。中村先生には、祈祷の作法などいろいろなことを教わりましたが、分からないことがあれば何でも聞いていい、とおっしゃりながらも、実際にはほとんど答えてくさいませんでした。

私が夜中の一時くらいに起きて食事の準備をしても、中村先生は、味付けひとつ気に入らないと、「こんなもの食えるか!」と、お皿ごと私に投げつけてきました。

こうした中村先生の言動に振り回されただけではありません。中村先生は、法力を持つ私を前面に出し、自分の勢力を広げようとされていたようです。私の母は、そん

な中村先生の思惑に気づき、娘を利用されまいと必死に守ってくれました。そして神もまた、私を見守り続けてくださいました。そのおかげで、いまの私があるのだと思っています。

勝森先生と中村先生それぞれから、あらゆる心の苦行をもたらされただけでなく、二人の間で板挟みになり、非常に苦しんだこともあります。

両師匠が共同で新しく道場を開かれ、その開堂式に行ったときのことです。式典を終え、食事が終わったあと、勝森先生は私に「早く帰りなさい」とおっしゃいました。その言葉通り、私が信者の方々と帰宅しようとしたところ、中村先生が烈火のごとく怒り始めたのです。

「なぜ途中で帰るんだ！」。そして、これ以上ないくらいの罵声を浴びせかけたのです。それを聞いていた私の信者の方々は、あまりの言葉に我慢できなくなったのでしよう。中村先生と対立する形になり、場は騒然としました。



緊迫した状況の中、なんとか双方をなだめ、事なきを得ましたが、私は、こうした師匠との確執について、誰にも相談することができませんでした。自分一人の胸に収め、もがき、苦しむしかなかったのです。

二人の師匠とも、私を可愛がるときは、とても可愛がつてくれました。しかし、勝森先生は、女性の欲望を一身に背負ったような人であり、中村先生は、男性の欲望そのもののような人でした。両師匠のもとの味わった私の苦痛は、まさに、人間関係の中で生じるあらゆる心の苦行であり、精神の葛藤でした。

ただ、何があっても師匠に仕えると誓っていた私にとって、その苦しみを受け入れるのは当然のことでした。のちに周囲の方々に「あの師匠に仕えるなんて、あなたにしかできないことだ」と言われ、自分がどれだけ過酷な環境の中に置かれていたか、改めて自覚したくらいです。

端から見れば、信じられないくらい厳しい行の毎日だったと思いますが、私はどれ

ほどの仕打ちを受けても、神を信じ、崇めきり、「神は見えてくださる」という思いで生きてきました。そして、誰を恨むこともしませんでした。

この経験が、信仰を貫く強い気持ちを育ててくれました。想像を絶する苦難に向き合い、人の因縁をかぶり、だまされようとも、相手を信じて慈しむ心の強さが身についたのは、ひとえに、二人の師匠による苦行があったからこそだと思えます。そういう意味では、師匠たちには心から感謝をしています。

勝森先生に仕えて二十年経ったころ、私は両師匠から、思いもよらぬ言葉をかけていただくこととなります。実は、師匠たちの過酷な仕打ちには、きちんとした意味があったのですが、このお話は、もう少しあとで語ることにいたします。



第七章

結婚



私が天啓を受けて七年が経ったころ、私の「女性としての人生」を大きく変えるご縁がありました。それが「結婚」です。

私は、天啓を受けたのち、人を救う道に自分の人生をすべて捧げると決めていました。ですから、結婚や出産といった女性の幸せを手にしたいの思いは、すっかり消えていました。そんな私が、なぜ結婚するに至ったのか、そのいきさつを語っておきます。

初めて夫と出会ったのは、仕事を通じてでした。当時、夫は体が弱く、体調不良に悩まされ続けていました。それを心配した夫の母親が、「家を清めてほしい」と私のもとにやって来られたのが、そもそのきっかけでした。ですがその前に、私たちの出会いにつながる、ある不思議なお話をいたします。

日本初の万博が終了した昭和四十六年ごろ、一人の女性が私の道場にいらっしやいました。お子さんが三歳のときから小児ぜんそくに悩まされ、十六歳になつたいまも、学校にも行けず療養生活を送っているとのことでした。

相談の内容を聞いた私は、女性に「あなたの自宅がある土地で、首を吊った人はいませんか」と聞きました。すると女性は「そんなことは絶対がない。因縁がある土地に住むのがいやだったから、わざわざきれいな土地に家を建てたのだ」と答えました。ですが、土地というものは、私たちが生まれる何百年も前からあり、歴史をさかのぼれば、幾人もの人がそこで暮らしを営んでいます。その中に首を吊った人がいないとは言いません。

女性は、否定をしながらも、気になって土地のことを調べられたようです。そして数日後、「先生の言うとおりに、首を吊った人がありました」と報告してくれました。女性の家が建つ土地には、ずっと以前、大邸宅があったそうです。それを業者が取り壊して区画整理し、一般の人に分譲したのです。

首を吊ったのは、その大邸宅に住んでいた人でした。命を絶たれたのはお庭で、女性の住まいが建っている場所が、まさにそうだったのです。私は女性と一緒にお滝の行ぎょうに行き、亡くなられた方の供養をしました。すると、何をやっても治らなかつたお

子さんのぜんそくが快方に向かい、健康を取り戻していきました。

その後、女性は、不思議な初夢をご覧になりました。自分が私の仲人を引き受けている夢でした。つまり、結婚を暗示する夢でした。

その女性が相談にいられた翌日、ある一組の親子が道場にいらっしやいました。その息子さんのほうこそ、のちに私の夫となる人でした。

お母さんは私に「うちの息子は小さいころから虚弱体質で、いまは仕事をしながら、毎日点滴に通う生活を送っています。でも、なぜこんなに体調が悪いのか、原因不明なのです」と悩みを打ち明けられました。たくさんの費用をかけて、京都の嵐山まで行に出かけたこともあったようですが、息子さんの具合は一向に良くならないとのことでした。

私は次の日から、息子さんのほうに道場に通ってもらおうと言いました。すると一週間後、体調は見違えるように良くなり、「ずいぶん体が楽になった」と喜ばれました。



やがて「あなたのところに来るだけで、ぼくの体が楽になる」と言つて、仕事帰りに毎日道場に通うようになりました。私の母や祖母とも親しくなり、まるで家族のようにお付き合いするようになりました。ときには私が好きな食べ物をおみやげに持ってきてくれたり、行に同行してくれたりもしました。そんな姿を見て、私は「若いのに熱心だな」と思っていました。

あとで聞いた話ですが、夫は道場に通い出して三日目に、私との間に赤い糸のような運命的なものを感じたそうです。ですが、結婚など眼中にない私は、そのことにまったく気づきませんでした。

ある日、祖母が私に、ふとこうもりました。

「あの人、あんたのことが好きみたいだよ」

びっくりした私は、祖母に「冗談でもそんなことを言つてはいけない」と反論しました。信仰一筋と決めた私にとって、恋愛は頭の隅にもないことでした。好きだと言われても、その気持ちに答えることはできないのです。

年が明け、ますます行ぎょうに打ち込む私を、夫は映画に誘うようになりました。私はそれを「行で疲れているから、映画に行くより眠りたい。ほかの女性を誘ってほしい」とやんわり断っていました。それでも夫は「頼むから一緒に行ってほしい」と懇願し、私を誘い続けました。

そんな夫が、あるとき、一カ月ほどぼったりと姿を見せなくなったことがありました。その時期、私はたまたま仕事のために夫の自宅に足を運ぶことになりました。

お宅にうかがうと、夫の母が出てきて、「先生、このごろ息子の様子がおかしいんです。夜も眠れていないようで、仕事も手につかない状態です。何かに悩んでいるようなのです」とおっしゃいました。

私は明るく笑い、「彼は素敵な男性ですから、きっと好きな人でもできたのではないでしょうか」と答えました。私のところに来なくなったのもそのためだ、と思ったのです。

ですが、実際は違いました。夫は私にプロポーズすることを考え、悩んでいたのです。

相手が普通の女性なら、あれほど悩むことはなかったと思いますが、私は天啓を受け、魂は天界にありながら、人を救う道に一生を捧げた人間です。そんな女性に、自分がプロポーズしていいのだろうか、激しく葛藤していたのです。

私は、そんな夫の胸の内にもっとく気づかず、母親に向かって軽い気持ちで「好きな女性ができたのでは？」と言ってしまったのです。

このことが、あとで大問題となりました。

私はそのころ、夫を男性としては見ていませんでしたが、一緒にいるとなぜかとても気が合いました。話し出すと何時間でもおしゃべりが続くほど、会話が尽きなかったので、自然とともに過ごす時間が増えました。周囲はそんな私たちを見て、お似合いの男女だと思っていたようです。

ある日、夫がふいに、プロポーズのような言葉を口にしました。しかし私は、「誰かほかの女性に向けた言葉だ。いったい誰にプロポーズしたいんだろう」と思い、聞

き流していたのです。その後も、同じような遠回しな言葉を投げかけられたのですが、まさか私に対するものだとは思っていなかったもので、ほかの女性にプロポーズしたいのを、私に相談しているのだとばかり思っていました。

その夜、床についたとき、私は今日一日の出来事を思い返していました。そのときになって、私はようやく「あ、あれはほかの女性ではなく、私に対してのプロポーズだ！」とハッと気がついたのです。

とても慌てました。大変なことになったと思いました。同時に「何とかして断らなければ」と思いました。夫は悩んだ末に、思い切って私にプロポーズしてきたのです。その覚悟の大きさを思うと、中途半端に返事を引き延ばすわけにはいきませんでした。信者の花岡さんに相談すると、「先生と彼との気の合いようは格別。あんなに気が合う人は人生においてめったにない。ぼくはうらやましい」と言われました。でも、だからと言って結婚を受け入れるわけにはいきません。私は夫に、生涯独身を通し、信仰の道を極めることを告げ、「この仕事をやめることはできない。家庭には入れない」

と言い、プロポーズをきっぱりお断りしました。

しかし、夫はあきらめませんでした。私が「もし結婚するのであれば、あれも、これもしてもらわなければならぬ」と、わざと無理な条件を突きつけても、夫は何のためらいもなく「すべて受け入れる」と答えました。

そんなやりとりを十日間くらい繰り返すうち、私の考えも少しずつ変わっていきましました。そこまで私のことを思ってくれているなんて、なんと有り難いことだろうと感じるようになったのです。そしてついに、夫のプロポーズを受けることにしました。

結婚を決め、初めて二人で車で出かけたとき、運転席に座る夫の顔が大きな喜びに満ちているのを見て、私はこう思いました。

「こんなに私といることを喜んでくださるなんて、何ともつたないことだろう」。これほどまで人に愛されることに、大きな感動を覚えた瞬間でした。

私たちは、両家の親に結婚の報告をしました。ところが、二人の気持ちとは逆に、

親は結婚に猛反対しました。

まず夫の両親が反対しました。大切な息子が、宗教家である女性と結婚したいと言ってきたのですから、無理ありません。特に夫の母親は、「念力で息子を狂わせた」と私を非難しました。それまでは「先生」と呼んで頼ってくださっていたのですが、私を見る目が一変したのです。

そして、夫が一カ月間ふさぎこんでいるとき、私が「好きな女性でもできたのでは？」と言ったことを思い返し、「息子の気持ちを知っていながら、よくものうのうとあんなことを言ってくれた」と激怒し、私を悪い女だと見るようになったのです。

相手の家に反対されているのを知った私の両親は、そんな家に娘を嫁がせることはできないと思ったのでしょう。母は「そこまで一人の男性に思われたのだから、もうそれで満足だろう。だから結婚はあきらめなさい」と言いました。そして、道場に通っていた夫にも「娘のことはあきらめてほしい。一生、どこにも嫁ぐことはないと思うから」と説得しました。

ですが、恋とは不思議なもので、反対されればされるほど燃え上がるものです。周囲が別れさせようとするほど、私たちは「必ず結婚する」という意志を固めていきました。

それでも、両家の親は結婚を許しません。とうとう夫の両親は、夫の姉のご主人、つまり義兄まで立て、私たちを別れさせようとなりました。

別れ話をするため、義兄が道場に来られる日、いつものように神棚に向かって拝んでいると、見たこともないほど立派な結納品のお知らせがありました。そして仏間で、非常に立派な高砂人形のお知らせがあったのです。私は、「両家からこれほど反対されているのに、結婚を示すお知らせがあるなんてどういふことだろう」と首を傾げました。

午後になり、義兄がやってきました。私たちを説得するというのは表向きで、おそらく、夫を私から引き離すために来られたのだと思います。ところが、私や私の両親と話すうち、義兄はすっかり私たちのことが気に入られたようで、逆に結婚に賛成し

てくれたのです。

そのことが、かえって夫のご両親の怒りを増してしまいました。結局私たちは、そこまで家族が反対するならば、後ろ髪を引かれる思いで別れることになりました。

しかし、結ばれるべきご縁というものは、どれほど周囲の反対に合おうとも、再び引き寄せ合う力を持っているのです。一度は別れたものの、しばらくのち、私たちは再会を果たし、家族の反対を覚悟の上で、結婚式を挙げることにしました。

天啓を受けて丸七年。ただ人を救うためにすべてを捧げてきた私にとつて、結婚は神からの贈り物でした。別れ話の日に、神から結納の啓示をいただいたのです。これこそまさに、神からいただいたご縁であると受け止めました。

結婚式には、私や夫を慕ってくださる方、信者の方々のほか、勝森先生も列席してくださいました。そして、仲人を引き受けてくださったのは、お子さんのぜんそくのことを相談しに来られ、私たちの仲人をする初夢をご覧になった、あの女性の夫婦で



した。夢が現実となったのです。

結婚後も、しばらくは親の反対が続きましたが、誠心誠意、お互いの両親に尽くすことにより、氷が溶けるように、少しずつわだかまりも解けていきました。長い年月がかかりましたが、神のご縁をいただいたことに感謝し、二人で根気よく分かっていたく努力をしました。

人生の中で、自分が思うようにならないことは、どなたにもたくさんあるかと思えます。それを恨みに思わず、ご縁に感謝し、努力を重ねることで、人生は開かれます。相手のために、まわりのために、その身を尽くすことは、神からいただいたご縁を大切にすることに他なりません。そうしていれば、たとえつらい状況が続いていても、いつか必ず、春はやってくるのです。

第八章

巢立ち



結婚してからというもの、私の生活は、さらにめまぐるしくなりました。朝起きて家事をし、終わるやいなや、着物に着替えて人を救う仕事に就きます。仕事のあとは、すばやく着物から普段着に着替え、夕食の支度。夜も仕事や行ぎょうに明け暮れていたのです。睡眠時間は三時間くらいしかなかったかと思えます。

さらに、私の自宅兼道場は、いつも人であふれていました。救いを求めてやってきた人が常に何人かいて、私たちと寝食を共にしていました。私の祖母や両親は、自分のことより他人のことを思いやる人で、外で仲良くなった人に「うちでごはんを食べに行つて」とすぐ自宅に招いていました。四畳半の部屋に、十数人がひしめき合つて食事をしたこともあります。

そんな調子でしたから、私たち夫婦は、ほとんど二人だけの新婚生活を送つたことがあります。私の両親も、祖母も妹も、人とのご縁を大切に思い、困つた人に手を差し伸べることを当たり前のようにならしたので、お金はなくても、わが家はいつも人でにぎわっていました。

結婚のとき、私は「夫と暮らせるのなら、どんなことにも耐えられる。貧乏で食べるものがなくても、水さえ飲めればいい」と思っていました。ですから、新婚生活を満足に送ることができなくても、十分に幸せだったのです。

ただ、信仰の道を行く者としての心の葛藤がありました。私の使命は、人を救うことに身を捧げることですから、家庭にのめりこんではならない、女性としての幸せにどっぷり浸かつてはならないと、いつも自分をいさめていました。

私は、結婚と前後し、信仰の面でも重大な節目を迎えさせていただきました。それは、一人の宗教家としてスタートを切る予兆であり、新たな道のりの始まりでもありました。

結婚前のある日、私は勝森先生とともに、中村先生の道場で、冬の厳しい行にのぞんでいました。一面雪だらけの福知山で、朝一時に起きて準備をし、夜が明けたらひたすら行に励むという毎日を繰り返していました。

あるとき、勝森先生がまじまじと私の顔を見て、こう言ったのです。

「和ちゃん、私はいままで、これでもか、これでもか、これでもかというほど、あんなをいじめ抜いてきた。だけど、よくついてきてくれたね」

正直、とても驚きました。行を始めた小学校五年生のときから、勝森先生には、白を黒と言わなければならない理不尽を何度も経験させられ、血のにじむような心の痛みを与えられてきたのです。しかし、それもこれも、勝森先生は分かっていたとやっていました。

私は、深々と勝森先生に頭を下げ、こう言いました。

「おかげで根性をつけさせていただきました。ありがとうございます」

時期を同じくして、中村先生にも、同じような言葉をかけられました。

「わし、後悔していることがある。お前にきつく当たりすぎた」

中村先生も、勝森先生と同じく、分かっているひどい仕打ちをしていたのです。

私は、両師匠の言葉を聞いたとき、「ああ、ようやく認めてもらえたのだ」と心か

ら思いました。そして、あの精神をいじめ尽くすような仕打ちは、己を鍛えるための心の行だったと、改めて感じました。

両師匠との関わりは、もちろんその後も続いていきました。結婚のとき、私は師匠たちに、夫と一緒にいることを報告しましたが、すぐさま反対されました。特に中村先生には「やれるものならやってみろ」と叱られました。先生は当時、ご自分の宗教法人を作ろうとしていたので、後継者にしようと思っていた私を、結婚によって他人にとられたくなかったのだと思います。

勝森先生は、厳しいながらも、私を娘のように思っていてくださったので、結婚式には参列してくださいました。しかし、その心中は複雑だったと想像します。

そんなことがありながらも、両師匠のあの言葉は、そろそろ師のものを離れ、独り立ちしなさい、という暗示であったと思います。結婚した翌年の昭和四十八年、夏が近づくころ、私は神から「師匠のもとに、すだちと鮎を持っていくように」とのお知

らせをいただきました。ここには、非常に重要な意味がこめられていました。

すだちは、新鮮な柑橘の香りがすがすがしい果物ですが、「巢立ち」と読み解くことができません。鮎は、清流にすむ美しい魚ですが、清らかな心を象徴するものでもあります。つまり、すだちと鮎を二人の師匠に贈るということは、私の神から、師匠の神への「独立のあいさつ」だったのです。

振り返れば、師匠に仕えて丸二十年、天啓を受けて丸八年の歳月が過ぎていました。私はようやく神から認められ、身も心も一本立ちしたのです。それは、天啓を受けたときと同じくらい、大きな意味を持つものでした。

すだちと鮎を師匠に贈って以来、物事が万事順調に進むようになりました。道がパツと開けたのです。宗教家として、本当の意味で独立を果たしたのが、このときでした。

私はよく、人から「強いですね」とほめていただきます。でも、もともと強かったわけではありません。生まれて間もないころは、真綿にくるまれるように育てられま



したし、幼少のころは、家族に守られるように暮らしていました。そんな私が強くなれたのは、ひとえに、二人の師匠がもたらしてくれた「心の行」のおかげです。

この体験のおかげで、どれほど難しい性格の方であっても、他人に心を開かない方であっても、区別することなく、平等に、全身全霊でお救いしようという気持ちを強く持つことができました。そして、何ごとにも感謝し、前向きに生きる大切さを教わりました。今日の私の強さを作ってくくださったのは、まぎれもなく、両師匠です。

そして、あれほどつらい仕打ちを受けながら、ゆがむことなく真つすぐに生きてこられたのは、家族のあたたかい愛情と、神の見守りがあつたからこそです。「いつも神がここにいる」という思いが、私の支えとなったのです。

私は人を助けることに、何の見返りも求めませんでした。ただただ、人をお救いし、幸せになってほしいと願っていました。

すだちと鮎の一件と同じ時期、私は神から、次のようなお知らせをいただきました。

よく辛抱したな。

神の情けで家を与える。

そのころ、わが家にはほとんどお金がなく、日々食べるのが精一杯でした。とても家など建てられるものではありませんでしたが、お金がなくても家が建つという、不思議な経験をしました。

きっかけは、信者の一人が教えてくださった建売住宅の情報でした。近くの商店街で新築が売りに出されていると聞き、神におうかがいを立てたところ「その家を買いなさい」との啓示がありました。

手付金は手元にありましたが、家を購入するだけの大金はありません。私は融資をお願いするため、銀行に出かけましたが、「あなたの少ない収入では融資は無理だ」と言われてしまいました。

困っていると、そこに助けが現れたのです。建売住宅を販売している不動産業者の社長が、私たちを見て「若いのががんばっているから、何とか買えるようにしてあげたい」と、銀行に定期預金をしてくださったのです。それが信用に結びつき、その場で融資が下りたのです。銀行の係の方が「融資の審査はたいいて二週間待ちなのに、その場で融資が決まるのは初めてのことです」と驚かれた言葉が、いまでも耳に残っています。

夫はこのとき、初めて「信仰の力」を目の当たりにしたと言います。お金がないのに家を買うなんて、普通はあり得ないことなのに、トントン拍子で融資が決まったのです。神の力がなければ、到底起こりえなかったことでしょう。

家を買ってすぐに、私のお腹に赤ちゃんが宿っていることも分かりました。仕事に専念するため、子どもは生まないと決めていたのですが、神から「一人だけ授ける」とお知らせがあり、その通りになりました。

翌年の夏、私は女の子を出産しました。「順子」と名付けましたが、この名前も、神からお知らせいただいたものです。出産後、病院のベッドで寝ていたとき、真っ白な天井に、大きな文字で「順子」と書いてあるのに気づきました。私は「変わった天井だな」と思ってながめていたのですが、私以外の人に、その文字は見えていませんでした。

後日、子どもに命名しようと、神に何度も名前を尋ねましたが、神からのお知らせはありませんでした。私は「あるとき、天井に書かれていた文字が、子どもの名前だったのだ」と悟り、順子と名付けました。

出産を終え、二〜三カ月の産休をとったあと、私は仕事に復帰しました。これほど長く仕事を休んだのは、後にも先にも、このときだけです。



第九章

信念を貫く心



子どもが生まれてからというもの、私は以前にも増してやる気がみなぎっていました。「もっと人を救いたい」という気持ちがあふれ、乳飲み子のわが子を母に預け、仕事と行に打ち込みました。

年が明け、お正月が終わったころ、ある信者の紹介で、一人の若い女性が道場を訪れました。名前を木内桂子さんと言いました。

彼女は、足を骨肉腫に冒されていました。腫瘍のせいで骨が溶けており、二回目の手術が終わった時点で、足を切断しなければならぬと医師から告げられていました。彼女の母親は大変悲しみ、私に「何とかこの子を救ってもらえないだろうか」と頼み込まれました。

しかし当の本人は、足を切断することを半ば覚悟し、義足も注文していました。二十四歳という若さでしたが、顔色は青く、骨肉腫のある足を投げ出すように座っていました。

木内さんの病状は、思ったより深刻でした。拜んだとき、骨箱が表れたのです。それは、命が助からないという暗示でした。しかし私は、やるだけやってみようと心に決め、木内



さんを自宅でお預かりすることにしました。

当時の木内さんは信仰心が薄く、私のところに来たのも、母親に連れて来られたからであり、自分からすすんで救いを求めてきたわけではありません。

わが家にやってきた木内さんの生活ぶりを見て、私や私の家族は、彼女が普通でないことにすぐに気がつきました。料理、洗濯、掃除、どれ一つ満足にできないのです。こちらが何かを教えようとしても、それを素直に受け止めようとしませんでした。それどころか、すぐに反発し、ふてくされてしまうのです。叱られても謝らず、自分勝手に振る舞っては、周囲に迷惑をかけていました。自分が深刻な病に冒され、そのために、まわりの人がどれだけ心配しているのかも、分かっていない様子でした。

私は、これではいけないと思い、料理の仕方、掃除や洗濯の手順など、すべて一から教えました。子育て、仕事、家事、そして木内さんを救うための行<sup>ぎょう</sup>と、目が回るほど忙しかったのですが、彼女には、人としての常識をきちんと教えなければならぬと感じたのです。

もう一つ、助かるために、どうしてもやってもらわねばならないことがありました。そ

これは「歩くこと」です。木内さんは、歩くことを極度に怖がっていました。医師から「歩くと骨が折れ、ガン細胞が体に飛び散る」と言われていたからです。ですが、神からは「歩かせなさい」とのお知らせがあり、それが命を救う道でもありました。私は、怖がる木内さんを根気よく説得し、なるべく歩くように働きかけました。

しばらくして、私が木内さんの身代わりとなつて、お滝の行をおこなったときのことで、思いがけず、神から非常にうれしいお知らせをいただいたのです。木内さんの命が助かる、と出たのです。「命をいただいた」。私は思わず号泣しました。あきらめずに良かったと思えました。そんな私を見て、木内さんはキョトンとしていました。

お知らせをいただいたとき、木内さんの血液検査の数値は、まだ正常値ではありませんでした。しかし一年後、再び病院で検査を受けたところ、一年前のレントゲン写真には、腫瘍が骨を溶かしている様子がはっきりと写し出されていたのに、このときの検査では、腫瘍は跡形もなく消えていました。溶けた骨の横には新しい骨が再生され、もとの健康

な足に戻っていたのです。そして、血液検査の数値も、すべて正常値に戻っていました。

木内さんを診察した病院の院長先生は、この検査結果を見て「私の誤診だったかもしれない」とおっしゃったそうです。それくらい、骨肉腫はすっかり治っていました。

木内さんは、その後も私のもとで暮らし、五年間寝食を共にしました。骨肉腫が完治したあと、自宅に帰そうかと思っただけでもありましたが、わがまま気ままな生活を改め、女性としての常識を身につけることが、彼女の幸せにつながると考え、行儀見習いとしてしばらく留まってもらったのです。木内さんは後年、無事に結婚し、現在も元気に道場に通っております。

木内さんが訪れてからの数年間は、公私ともにさまざまな変化がありました。何よりも大きかったのは、信者の方々がどんどん増えていったことです。

木内さんをお預かりした翌年、信者の同級生に連れられ、糸敏夫さんという男性が訪れました。頭痛がずっと続いており、病院でレントゲンを撮ったところ「首の骨が曲がっ

ている」と言われたのです。信仰一本に賭けると決心された糸さんは、病院にはかからず、私のもとでお滝の行などを毎月おこないました。その結果、頭痛は完治し、首の骨も真っすぐに治りました。

信仰の力に触れた糸さんは、その後、私への弟子入りを希望されました。しかし、私はある理由からそれを断りました。なぜ弟子入りを拒んだのか、それをお話する前に、深い因縁を抱えていた俵真二さんのことを語らなければなりません。

糸さんが太魂院に來られてから三年後、俵さんが私のもとにやってきました。また十代という若さでしたが、因縁のため、大きな苦しみを味わっていました。私は彼を救うために、自宅にお預かりし、生活をともにすることにしました。

そんなある土曜日の夜のことです。私は数人の信者の方々が見ている前で、突然、心筋梗塞に陥り、五本の指で壁をかきむしるように空中をつかんでもがき苦しみました。少しでも空気があるところに行こうと、「うーっ」とうなり声をあげ、身体をねじりなが

ら膝立ちで壁を爪で引っかくがごとくもだえ苦しみ、そのあと、まるで糸が切れたように床にボタンと倒れ込みました。

横にいた夫が、倒れた私を慌てて受け止めたのですが、その腕の中で、私は顔面が真っ白になりました。夫はそのとき、因縁のためにとうとう私の命が奪われてしまう、と思ったそうです。俵さんにまつわる因縁、人々の怨念のような思いが、そうした凄まじい形となって表れたのです。

そんな状態になりながらも、私は「お護摩を焚いて浄化しなければ」と思い、道場に向かおうとしました。しかし、風が通っただけで息ができなくなり、一步も歩くことができません。俵さんをはじめ、数人の方にすまきのように布団にくるんでいただき、やっとの思いで祈祷の場まで連れて行ってもらいました。このときばかりは、さすがに「寿命が尽きるかもしれない」と死を覚悟しました。それほど強い因縁だったのです。そしてこのとき、まだ幼稚園児だった娘に「声の遺言」を残し、私は護摩へと向かいました。

お護摩を焚くとき、私は、心配そうに見守る俵さんや数人の信者の方、そして家族に、「何

が起こつてもうろたえてはいけない。たとえ私が護摩の火の中に頭を突っ込んで息絶えようとも、朝まで騒いではならない」と伝えました。俵さんを救うためには、そうまでしなければなりませんでした。

息ができない中、命がけのお護摩が始まりました。傍らで見ていた俵さんは、体が凍り付いたように動かなかったそうです。あたりは異様な雰囲気に入れられ、ただお護摩の煙だけが立ち上りました。

長い夜が明け、すべての護摩が終わったとき、私は「助かった」と思いました。因縁に打ち克ち、命をいただくことができたのです。

道場をあとにし、横になった私を見て、一睡もせずにお護摩を見守っていた俵さん、木内さん、花岡さん、清水さん、糸さん、そして両親は、私にすがりつき、堰を切ったように号泣し始めました。目にした光景があまりにも恐ろしく、震え上がるくらい張りつめていたからでしょう。因縁をかぶることの恐ろしさ、それを浄化することのすさまじさを、身をもって体験したことと思います。普段は気丈な私の母ですら、私の枕元で泣いていま

した。

このように、人を救うとは、まさしく命がけの行為なのです。時には、自分の生命をも奪おうとする因縁と向かい合い、それに打ち克たなければなりません。その上、私には夫と娘があり、仕事と両立して家事や子育てをしなければなりません。その忙しさを知った人は、「これほど大変な生活をしているとは思わなかった」と、心から驚いていたほどです。

端から見れば、私は仕事一筋に生きる、キャリアウーマンのように映ったでしょう。でも実際には、眠る時間もないほど、過酷な生活に身を置いていたのです。

弟子入りしたいと来られる方々の中には、私の仕事に憧れのような気持ちを抱いている人もいます。しかし、人を救う道に生きるとは、生半可なことではないのです。中途半端な覚悟では、とても務まらない道なのです。だから私は、糸さんの弟子入りを拒んだのです。

衆さんは、弟子入りをしたいあまり、私の夜中の行が明けるまで、道路で正座して待っているほど熱意のある方でした。そんな衆さんですら、弟子入りを途中であきらめようかと、気持ちが悪らついたときがありました。そのとき私は「そんな揺らつく気持ちで、人を救う仕事はできない」と諭し、この道の厳しき辛さを説かせていただきました。結局、衆さんは最後まで信念を貫くことができず、途中で俗世に戻られました。

人を幸せにお導きするには、身を粉にしても苦しみを乗り越えようとする固い決意が必要なのです。それがなければ、人を救う道に入ってはいけません。それが当時の私の考え方でした。

その二十数年後、私は弟子を取るようになるのですが、なぜそのようないきさつになったのかは、またあとで語らせていただくことにします。

いずれにせよ、どんな苦難も乗り越え、人をお救いすると決めた初心を、私はいつも大切にしています。信念を持って貫き通し、慈悲と布施の心を持って供養を積み重ねれば、因縁を浄化し、幸せの光を浴びることが出来ます。お救いした本人も、その周囲の人も、



そして因縁のもととなった霊も、計り知れない喜びを得ることが出来ます。

因縁を作り出してしまふのは人ですが、それを浄化できるのもまた、人なのです。皆様のために身を尽くし、命を尽くしていくことが私の役目。それを忘れずに、これからもひたすら精進していこうと思っています。

桑さんと出会った翌年の昭和五十二年、師匠の勝森先生が亡くなりました。四年後の昭和五十六年には、私の父が亡くなり、翌年には祖母が逝去。そして昭和五十七年の暮れ、もう一人の師匠、中村先生が亡くなりました。私の身近な人が、相次いでこの世を去ったのです。

二人の師匠が亡くなったことで、私は期せずして、独り立ちすることとなったのです。そして、四十代になった私は、身も心も充実の時を迎えていたと思います。これまでとは違う試練が待ち構えており、新たな苦難の人生が始まろうとは、このときは知るよしもありませんでした。

第十章

宗教法人として



ただ人を救いたいという一心で、弟子もとらず、ひたすらに仕事に励んでいた私に、一つの転機が訪れました。それが、太魂院の前身である「宗教法人 妙見宗 太魂教会」の誕生です。

それまで私は、救いを求めてやってくる方々をお助けできればそれで良い、と思っていましたので、道場には看板すら掲げていませんでした。ですから、道行く人は、そこが道場であることすら知らなかったでしょう。それでも、苦しみや悩みを抱える人は、人づてに私のことを聞き、道場を訪れていました。

私はこの仕事を、自分一代で終わらせるつもりでした。跡取りを作って道場を拡大し、大規模な宗教団体を作ろうという気持ちは、少しもなかったのです。

しかしある日、一人の信者が、私にこう提案してきました。

「先生、太魂教会を法人化しましょう」

そう言い出したのには、理由がありました。私のもとには、木内さんをはじめ、生活や行動をともししている信者が何人かいました。そして、足しげく道場に通ってく

る方も数多くいました。そんな方々の願いは、社会的に認められた宗教のもとで、手を合わせたい、というものでした。

宗教団体は、時として、世間から強い風当たりを受けることもあれば、誤解されることもあります。そんなとき、宗教法人という社会に認められた格式があれば、肩身の狭い思いをすることなく、信仰に打ち込むことができます。

宗教法人にするとはつまり、国に届け出て、きちんとした宗教団体としてお墨付きをもらうことです。でも、人を救うという使命で精一杯の私には、法人化の手続きに時間を割くことはできません。何よりも、本心から宗教法人を作りたいとは思っていませんでした。そんなとき「手続きはすべて私がします」と言ってくれたのが、宗教法人化を提案してきた信者の方でした。

私は、何度も何度もお断りしましたが、その熱い思いに触れ、申し出をありがたく受け入れることになりました。それに、「どうせ宗教法人にするなら、日夜私のまわりで道場を支えてくれる方々が、先の生活に困らないよう、社会保険に入れてあげ

たい」との思いもありました。たとえ私の負担が大きくなろうとも、それだけは果たしたいと、決意したのです。

名も知られていない一つの宗教団体を、社会的に認められた存在にするためには、非常にたくさんの手続きを必要としました。それでもその信者の方は、とても強い意志のもと、膨大な資料を必要とする手続きをやりきってくれたのです。私もまた、やるからには法人化をきちんと成し遂げる、という気持ちになっていました。

「宗教法人にしましょう」と提案されてから、三年もの月日が流れたころ、太魂教会はようやく、「宗教法人 妙見宗 太魂教会」になることができました。昭和六十一年一月に宗教法人の認証をいただき、社会に認められる存在となったのです。信者の皆様の心には、これで胸を張って手を合わせられるという安心感が宿ったのではないかと思います。

宗教法人は、社会的には会社と同じような位置づけにあります。会社に入ると、社

員は社会保険に加入することができ、いざという時には最低限の生活が保障され、年をとれば年金をもらうことができ、病気になった時には健康保険で診てもらえます。それと同じことが、宗教学法人になると、できるのです。

同時に、税金を払う義務も発生してきます。宗教学法人は基本的には非課税ですが、活動に使っているお金、職員に支払っているお金をきちんと区別し、税金を払う必要があるものについては、きちんと国に納めなければなりません。そうした義務を果たすことで、「社会に恥じない正統な団体」とみなされるのです。

また、宗教学法人に入るお金は、一円たりとも私の自由には使えません。ボールペン一本買うにも、領収書がないと、教会からお金を出してもらえません。法人化すると、それくらい、公私の区別をつけるということです。だからこそ、社会的に認められるでしょう。

実は、宗教学法人にして以来、私の生活はさらに苦しくなりました。身近にいる人の

社会的な保障を重視するあまり、自分の生活費のことを後回しにしてしまったのです。生きている以上、食べるのにお金が必要ですし、幼い娘や家族を養う元手も必要です。でも、そうしたことにまで、しっかりと考えが及ばなかったのです。ただ、信者をはじめめとするまわりの皆様が幸せであればいい。そんな気持ちでした。

また、宗教法人にしたことで、団体としての「信用」がつかまりました。信者の方々の熱い思いのもと、小さな道場から宗教法人へと生まれ変わり、身近にいる人を社会保険で守ることができ、信者の皆様に「信用」という安心感を与えることができました。私はここにも、神のお導きを感じずにはいられません。





第十一章

半身不隨に



晴れて宗教法人となり、私はこれまで以上に、充実した心身のもとで、さらに信仰の道に励むことを心に誓っていました。しかし、法人化を果たしてからわずか二週間後、私に、これまででない大きな苦しみと試練がもたらされたのです。

宗教法人が出来上がる前の年の昭和六十年、私は道場でお護摩を焚いていました。その日は、十二月十二日の「秋津天御親太御魂大神あきつあまみおやふとみたまのおおかみ宣名祝賀法要」の日でした。二十年前、「秋津天御親太御魂大神」という名前の啓示をいただいた大切な日です。太魂院では、毎年この日、お護摩を焚くことになっています。

その日も、年の瀬の恒例行事として、宣名護摩を行っていました。しかし、この日はいつもとは様子が違っていました。何十年も消えたことのなかった護摩の火が、消えたのです。しかも十数回にわたって、何度も消えました。これまでなかったことだけに、これは普通ではない、と思いました。

そしてそのとき、神から次のようなお知らせをいただいたのです。

左半身に気をつけよ。

私は、信者の皆様に対して、神が「気をつけなさい」と言っているのだと解釈し、どなたにも災いが起きないよう、懸命に拝むとともに、気をつけて行動するよう皆様にお伝えしました。そして年末には、何事も起きないよう、行をおこないました。

年が明けた昭和六十一年の一月十三日、宗教法人妙見宗太魂教会が設立されました。そして二週間後の一月二十七日、入魂祝賀法要の日、事件は起こりました。

その日は朝からむかつきがひどく、一日乗り切れるかどうかという体調不良に見舞われていました。私は、こんな大事な日にお護摩の最中に倒れでもしたら、信者の皆様に迷惑をかけてしまうと思い、初めてたった一人で自分から病院に行き、むかつき止めの注射を打ってもらうことにしました。

私は元来、薬が体に合わない体質です。必ずと言っていいほど強い副作用が出て、余計に具合が悪くなるのです。ですから、よほど切羽詰まった理由がない限り、自分

から病院に出向いて、注射を打ってもらおうとは思いません。ですが、この日だけは、どうしても倒れるわけにはいかない、という気持ちだったのです。

神から「左半身に気をつけよ」とのお知らせをいただいて以来、私は信者の皆様に災いが起こらぬよう、予定していた年始の旅行も取りやめ、ひたすら行に打ち込んでいました。そうして迎えた入魂祝賀法要の日に、私が床に伏せるようなことがあってはならない、早く症状を回復したいという一心で、普段なら夫に相談してから病院に行くのに、自分の判断で注射を打ちに行ったのです。そのことが、あの出来事につながってしまったのです。

それは、病院で注射を打ってもらった直後のことでした。急に、私の全身が興奮状態に陥ってしまったのです。注射の薬剤による副作用がもたらした、異常事態でした。喉の神経が地に引きつけられ、目の神経が天につり上げられるがごとく、体を苦痛が襲いました。それは、身が二つに引き裂かれるかと思うくらい激しいものでした。

以前、心筋梗塞を起こしたときよりも、もっと凄まじい苦痛でした。

意識はありました。ですがそのために、私は大変な苦しみを味わうことになったのです。静脈が早鐘を打ち、血管が破裂するのではないかというくらい大きく波打ちました。そして、喉が渴いて仕方ありませんでした。でも心のどこかで「水を飲んだら命を落とす」と思っていたので、一滴も飲まずに耐えました。

私は、いっそ殺してほしいと思うほどの苦しみにあえぎながらも、医師に「この注射を打ってください」と頼みました。どんな薬を投与すれば、自分の症状が改善するか、分かったのです。私は医師に薬の名前を告げるとともに、夫を呼んでもらうよう、自宅の電話番号を告げました。しかし、そこで声が奪われました。まったく話ができないほど、重篤な状態に陥ってしまったのです。

その様子を見て、医師は「何とかしなければ」と思ったのでしよう。私に、ありとあらゆる注射を打ちました。しかし、私が告げた薬は注射してくれませんでした。医学知識のない私の言葉を、素人の言っていることだと思い、信用してくれなかったの

です。

医師が打つどんな注射も、私には効き目がありませんでした。間もなく、知らせを受けた夫や家族が病院に駆けつけました。

医師は夫に、シヨック症状が続いていること、何をしてもまったく効かないことを説明しました。そしてそのとき、ふとこう漏らしたのです。

「話せなくなる直前、奥様が奇妙なことを言ったんです。『この注射を打ってほしい』と私にお願いされたのですが…」

これを聞いたとき、夫は「あ！それだ！」と思ったそうです。その注射を打てば、私が回復するとピンときたのです。夫は医師に「どうかその薬を注射してくださいませんか」と頼みました。しかし、医師はうんとは言いません。患者の家族の話を鵜呑みにし、注射したあとに何かあったら、とても責任を負えないからです。

ちょうど、医師資格を持つ信者の清水孝修たかひささんも、病院に駆けつけていました。夫は渋る医師に何度も頼み込みましたが、それでも承諾してくれません。そのとき、清



水さんがこう申し出たのです。「責任は私が持ちますから」。このひと言で医師を説得することができ、注射が打たれたのです。

やつのことで、激痛が少し和らぎました。しかし、危険な状態を完全に脱したわけではありません。もう一本、同じ注射を打つ必要がありました。でも、これには医師が頑として反対しました。「もう一本打ったら死ぬ」と言い、絶対に注射を打つてくれませんでした。

「私が打ちます。もちろん、責任は私がとります」。清水さんはそう言って、今度は自分が注射器を持ち、緊張で空気が張り詰める中、私に二本目の注射を打つてくれました。そのあと、私にようやくやく声が半分戻ってきたのです。

私は病院に入院することなく、その日のうちに自宅に戻り、養生することにしました。もしもあのかたのとき、救急車で大きな病院に運ばれていたら、苦しみのあまりのたうち回る私を、病院はベッドに縛り付けていたでしょう。

その後、新聞には、注射の副作用による事件が相次いで載せられました。救急車で運ばれなかったのは、神のご加護以外の何ものでもありません。

何とか命は取り留めたものの、全身は動かず、苦痛も相変わらず続いていました。家族は「今夜が峠かもしれない」と、覚悟を決めていたようです。

翌日、私はショック症状から脱し、起き上がれるようになりました。そして、人を救うという使命を果たすべく、その日から道場でお護摩を焚きました。

ですが、私の体には、注射の副作用による爪痕が残されていたのです。それは、注射のショック症状で倒れた八カ月後に起こりました。

九月十二日の朝、目覚めた私は、いつものように布団から出ようと思いました。ところが、体が動かないのです。起きようとする意志はあるのに、体が思うように動かず、私は布団の上で転げ回るしかありませんでした。

左半身麻痺。気がつけば、体の左半分が、まったく動かなくなっていました。そうです。宣名護摩のとき、神が「左半身に気をつけなさい」とお知らせをくださったの

は、信者の皆様のことではなく、私のことだったので。

こうして私は、半身不随となりました。このときから、五体満足の体ではなくなつたのです。

ですが私は、「体は動かないけど、目は見える」と思っていました。見えるということに、心から感謝をしたのです。

逆境に陥ると、つい自分の不幸に目が向きますが、そうすると、「あれがない。これが無い」と、悔やむ気持ちばかりが沸いてきます。しかし、自分にあるもの、残されたものに目を向けると、感謝の気持ちが沸き上がってきます。私はこのとき、目が無事であることを、本当に有り難く思いました。

左半身麻痺になつたあとも、行のため、私は欠かさず妙見山を訪れました。妙見山は、行をするにはふさわしい、厳しい環境にあります。冬は深い雪に閉ざされ、寒さが体にきりきりと染み込んできます。そんな中で、昼間は滝の行、夜になれば道場に

戻って火の行と、健康な人でさえ音を上げてしまいそうな行に明け暮れるのです。でも、つらいと思ったことはなく、より一層行に打ち込んでいました。

入山すると、私たちはいつも、高台に建つ宿坊に荷を下ろし、そこで寝泊まりしていました。トイレはその横にあり、段差のあるところを移動しなければ、お手洗いは行けませんでした。

半身麻痺になって以来、私はこの段差を一人で上り下りできなくなりました。しかし、信者の花岡さんらや本山の皆様のご好意で、トイレに続く道に階段や手すりをつけてくれたおかげで、不自由な体でも何とか移動できるようになりました。

行の最中、私の身の回りの世話は、まだ年若かった俵さんが引き受けてくれました。行に同行していた信者は全員男性で、女性は私一人だけです。行着を脱いだり着たりするのも、すべて男性である俵さんと主人に手伝ってもらわねばなりませんでした。そんな中でも、行を取りやめにすることはありませんでした。

たとえば麻痺を起こしても、手や足を動かすよう努力し、鍛錬すれば、少しずつ動く

ようになるものです。最初は一人で顔も洗えませんでした、そのうち、人の手を借りなくても、自分のことは自分でできるまでに回復していきました。歩くのだけは、誰かに手を持ってもらうなど、少し支えが必要でしたが、日常の動作は問題なくできるようになっていました。

注射のショック症状で倒れたとき、私は一度、病院で検査を受けています。そのとき医師に「原因不明なので、背中を切り開き、三センチほど神経を切り取って調べてみたい」と言われました。ですが私は、もしそんなことをしたら、一生寝たきりになってしまうと思いました。何しろ背中の神経を切り取るのです。二度と起き上がれなくなったら、もう人を救うことができなくなります。

私はその検査を丁寧に断りし、自力で足を回復させる道を選びました。医学の世界からすれば非常識かもしれませんが、私は「できないことはない」と思っていました。幼いころ、体が弱く、足を引きずるように歩いていた頃も、私はほかの子と変わ

らない生活をするため、あらゆる努力をしました。そして、学校の先生すら気づかないほど、元気な子と同じように過ごしていました。自分の置かれた立場に最大限感謝し、努力したのです。

人は努力次第でなんとでもなります。体が麻痺して動かなくなろうとも、自分のことをやろうとする「自立心」を決してあきらめない。そんな強い思いがありました。何事もそうですが、もうダメだと思つてすべてを放り出し、努力を怠つてしまふと、できることもできなくなつてしまいます。今日よりも明日、明日よりも次の日、という気持ちで一歩一歩進めば、いつか願いは叶うのです。

倒れて一年後、私は、杖をついて自分で歩けるまでに回復していました。注射のシヨック症状で命を失いかげ、原因不明と言われる麻痺になり、体の半分がまったく動かなくなつたことを考えると、それは奇跡的なことでした。

人に起こることは、幸も不幸も含め、すべてに意味があります。つらいこと、苦し

いことが起こったとき、それは自分が試されているときなのです。

不幸が起こったことを悔やんだり、誰かを恨んだりしても、苦しみからは決して逃れられません。むしろ、心の苦痛が増していくだけでしょう。そんなときこそ、自分が置かれた立場に最大限感謝し、素直な心で神を崇めきるのです。

私の場合は、麻痺によつて、体の左半分が自由を奪われました。しかし、体は動かなくても、目が見える。そのことに深く感謝しました。半身が動かなくなつたことよりも、見えることの有り難さが身に染みたのです。そうした体験ができたことを、私はいま、改めて「良かった」と思っています。

第十二章

母と子





振り返ってみると、私は、人生の節目節目に、何か大きな出来事を体験させていた  
だいています。注射のショック症状で倒れたとき、娘の順子は小学五年生で、ちよう  
ど思春期を迎える年頃でした。それはますます、母親が必要となる時期です。そんな  
ときに、半身不随に陥ったのです。まるでタイミングを見計らったかのごとく、試験  
をいただいたのです。

私と娘は、普通の親子関係とは少し違います。天啓を受けた母のもとに生まれ、幼  
いころから、昼夜を問わず仕事に励む私の背中を見て育ってきました。家族とのだん  
らんより、人を救うことを優先してきた私の傍らで、娘は大きくなったのです。

因縁を浄化するため、何度も命の危機に瀕していた私は、「もしも私に何かあっても、  
この子が自分の人生をまっすぐ進んでいきますように」との願いを、いつも胸に抱い  
ていました。人を救う仕事は、死と隣り合わせです。自分の身に、いつどのようなこ  
とが起こるか分からないのです。だから、何があっても、娘が強く正しく生きていけ  
るよう育てなければならぬと感じていました。

九章でお話しましたが、私が心筋梗塞を起こしたとき、幼稚園に通っていた娘に「声の遺言」を残したことがあります。そして、娘が中学一年生になったら聞かせてほしいと、夫に託したことを覚えています。そのくらい、覚悟を決めていたのです。

私にとって、生きていることは「当たり前のこと」ではありませんでした。いつ天に召されてもおかしくない身の上です。だからこそ余計に、娘の自立心を育て、自分のことは何でも自分でできるようにしつける必要がある、と考えたのです。

娘が物心ついたころ、私はある決意をしていました。それは、娘を決して甘やかすまいということです。甘やかして育ててしまうと、自立心が失われ、感謝の心が育たなくなります。祖母や夫が娘に優しい分、私は厳しくしよう、厳しくできるのは母である自分だけ。そんな思いで娘をしつけました。

心を鬼にして、人前で激しく叱りつけることもよくありました。そのあまりの厳しさに、端で見ているほうがつらい思いをしていたようです。それでも、しつけの手を

抜くことはありませんでした。それが、私なりの「母としての愛情」だったからです。世の中には、いろいろなお母さんがおられると思います。わが子をいつもそばに置いてかわいがるお母さん、欲しいものは何でも与え、何不自由なく育てるお母さん。いろいろな愛情の形があるかと思いますが、私の愛の形は、甘やかすことではなく、厳しくすることだったのです。

行着を着て仕事をしているときは、特に厳しく接しました。そのため、娘は長らく、私のことを本当の母だとは思えず、実の母はどこか別の場所において、いつか自分を迎えにきてくれるかと思っていたようです。祖母や父親の愛情を一身に受けながらも、娘は小学三年生のとき、幼いながら自分で荷物をリュックにまとめ、実の母を探そうと、家のベランダに家出をしたこともあるほどです。

でも、それも無理のないことかもしれません。私たちは、普通の親子のように、お菓子を作ったり、一緒に買い物に行ったりしたことはありません。その上、わが家にはいつも、家族以外の人がいっしょに住んでいました。食事をするときも、そうした

人たちがいつしよだったため、家族水いらずで食卓を囲んだこともほとんどありません。

本来なら、独身を貫き、信仰の道一本で生涯を終えるつもりでしたが、神のご加護によって、結婚という幸運と、娘を授かる幸せをいただきました。しかし、人を救う道を進むことは、私の定めなのです。天啓を受けて以来、これは変えることのできない宿命です。

私は、神を恐れてもいました。もしも人を救う仕事をおろそかにして、家族に心に向けてしまえば、家族を神に連れて行かれてしまうと思つたのです。神は人の心を見ます。私が人を救うことより、家族への愛情をとってしまったら、きっと神はそれを見抜かれます。そして、人を救う仕事に私を引き戻すために、家族を私から奪つてしまわれるでしょう。私の心は神のものであり、人を救うためにあります。家族のいる幸せは、その使命を全うしてこそ、与えられるものなのです。

神は私を可愛がつてもくれますが、その反面、厳しさもひと塩です。神から「一人

だけ娘を与える」と告げられ、順子を出産したあと、私はわが子のあまりのかわいさに、「二人目がほしい」と思いました。つい「我欲」を出してしまったのです。

しかし、二人目がこの世に誕生することはありませんでした。何度子を宿しても、流産してしまつたのです。自分のために二人目を産みたいという我欲を、神は見通していたのです。

私が我欲を出したのは、人生でたった一度、この時だけです。でも、その我欲を神が叶えてくれることは、決してありませんでした。人を救うためにこの世にいる私には、家族にあふれる愛情を注ぐことは許されませんでした。神に仕えるとは、そういうことなのです。

内心は私も、普通の母親でいたかった。娘に優しくしたい気持ちを抑え、葛藤を感じながら、娘を厳しくしつつける日々、つらさを感じなかったわけがありません。しかし、信仰を貫くからこそ、ご褒美として、夫や娘を持つ幸せをいただいたのです。私が信者の方々より家族を選んでしまえば、おそらくこの幸せは一瞬にして崩壊して

しまう。娘に厳しくしたのも、わが子をそんな不幸から守ろうとする、せめてもの母心だったのです。

そんな中でも、何とか時間を作り、人並みの家庭を築こうと努力しました。ですが、やはり普通のご家庭のようにはいきません。娘は二歳のとき、四十度を越える高熱を出したことがあります。このときも、私は娘の看病より仕事を優先しました。泣きながら追いかけてくる娘を振り払うように出かける私を、夫は「もつと母親らしくしてやれ！」と叱りつけました。子育てをめぐって、私たちは幾度夫婦げんかをしたか分かりません。

また、母親にかまってもらえない欲求不満からでしょう。一、二、三歳の頃、娘はおむつが取れたにもかかわらず、異常なほど毎日おねしょをしていました。これにはずいぶんと悩まされました。

幼い娘を残し、仕事のために三日間家を空けたこともありました。久しぶりに帰宅

すると、娘が私とまったく目を合わせようとしません。気持ちを開ざしていることが、すぐに分かりました。かたくなな心をほぐそうと、公園に連れて行こうとしましたが、娘は激しく抵抗しました。それでも、母として娘を抱きしめ、抱き上げて玄関を出たとたん、娘の表情ががらりと変わりました。駄々をこねていたのが、きらきらとした顔に変わり、気持ちが満たされていくのが手に取るように伝わってきました。

娘の欲求不満を何とか埋めたいと思い、私は意を決し、この仕事に就いて初めて、一週間という長期の休暇を取って、家族旅行に出かけたこともあります。船に乗って旅行に行つたのですが、娘ははしゃぎまわり、本当にうれしそうにしていました。

その日の晩から、あれほど悩まされていたおねしょが、ピタッと止まったのです。以来、一度もおねしょをすることはありませんでした。母親の愛情を受けた子は、これほどまでに変わるのかということを、目の当たりにさせていただきました。仕事を休んでまで家族旅行に出かけて、本当に良かったと思つています。



それにしても、私の両親が娘の面倒をよく見てくれたことが、私にとっては最大の喜びでした。私が四十代を迎えたとき、母が白内障にかかり、手術のために四十日間入院しました。昔のことですから、入院期間が長かったのです。しかし、病院から帰るとすぐ、父が亡くなったのです。母はそのショックから、精神状態が不安定になったのです。

母はしっかり者で、父が病床に臥せていたころも、献身的にお世話をしていました。そんな母が、まるで人が変わってしまったかのように、呆然と過ごすことが多くなったのです。

父の四十九日の法要のとき、粗相をしてしまった祖母の体をきれいに洗ってあげようと、朝から夫と二人で、祖母をお風呂に入れました。すると母は「何をのんきに二人でお風呂に入っているの？」とキョトンとして聞くのです。他人の行動や気持ちを察することができないほどに、母は自分を見失っていたのです。

私は、このままではいけないと思いました。人を助けることも大事ですが、自分の

母を助けるのも大切なことだ、と気づいたのです。私は、母を助けたい一心で、こうお願いしました。

「お母さん、忙しい私に代わって、順子の世話をしてくれませんか」

もしかしたら、小学校一年生になる孫の面倒を見ることで、気持ちに張りが出るのではないか、と思ったのです。すると、どうでしょう。孫の面倒をみるという言葉聞いた瞬間、ブルツと体を震わせ、うつろだった母の目が、突然輝き始めたのです。そして、以前のしつかり者の母に、一瞬にして立ち戻ったのです。

「分かった。まかせておきなさい」。母はそう言つて、娘が高校生になるまで、毎日お弁当を作り、かいがいしく面倒を見てくれました。本来は母親の私がやるべきことを、代わりに引き受けてくれたのです。

本心言えば、娘の世話は、私が自分の手でやりたいと思つていました。それは母としての楽しみですし、生き甲斐でもあります。娘は覚えていませんが、幼稚園から小学一年生のころまでは、お弁当づくりから朝の身支度まで、すべて私が面倒を見て

いました。でも、母に正気に戻ってもらいたいという一心で、私の役目をあえて母に託すことにしたのです。

人は誰かに頼られると、こんなにも精気を取り戻すのかと思うほど、母の回復ぶりには目覚ましいものがありました。母に娘の世話を任せて、本当に良かったと思つています。

しかし、その反面、娘と私の距離は広がっていく一方でした。ひな祭り、お月見、クリスマスなど、季節の行事には、母として精一杯できることをしてきました。しかし、そんな特別な日よりも、娘が恋しがっていたのは、日々の何気ない親子の時間だったのではないのでしょうか。

「いつだったか、私は娘に、こう言われたことがあります。

「お母さんは、私のことより、信者さんのほうが大事なんですよ」

辛辣な言葉でしたが、私と娘の関わり方を振り返れば、そう言われるのも仕方ありませんでした。普通の家族にある、普通の親子関係は、私と娘の間にはありませんで

した。

おそらく、周囲の目から見れば、夫や娘に恵まれながら、人を救う仕事にも精力的に取り組んでいる私は、公私ともに充実した人間に映ったでしょう。しかし実際には、家族とあたたかい時間を過ごすこともままならず、娘からは、母親とも思ってもらえないような家庭生活だったのです。

それでも私は、いつか娘に分かってもらえる日がくると思っていました。気持ちはすれ違っている、やはり親子は親子です。何も言わなくても、いつか私の心の内を理解してくれると信じていたのです。人並みの家庭のぬくもりを知ることなく育った娘でしたが、宗教家の子として生を受けた身です。人を救う仕事に打ち込む私を、娘ならきつと誰よりも分かってくれる。私は祈るように、そう思い続けました。

そんなある日、私は、親冥利に尽きる「かえがけのない一日」を体験させていただきました。それは、娘が小学校を卒業する日のことでした。そのころ、私は注射のシヨツ

ク症状で体が思うように動かなかったため、卒業式には夫に行ってもらうことにしました。しかし、私の父兄友達が「謝恩会だけでも出たら？私が手を引いてあげるから」と言ってくださったので、私は一年半ぶりに娘の学校へと向かいました。その謝恩会の席で、思ってもみないことが起こったのです。

娘の同級生のお母さん方が十人くらい、私を取り囲まれたのです。そして口々に「順子ちゃんのお母さんですか？順子ちゃんは本当にいいお子さんですね。素直で優しく、うちの子も大変お世話になりました。どうすればあんないい子に育てられるのですか？私にも教えてほしい」とおっしゃるのです。そして、学校の先生までもが、二人も私のもとに來られて、「浅田君はいい子です。将来どんな大人になるか、とても楽しみです」とおっしゃってくださいだったので。

私はびつくりしました。まさか、これほどまでに娘をほめていただけとは思いませんでした。娘は、父と祖母にはとても可愛がられました。仕事一途だった私からは、母親の愛情を肌身で感じることなく育ちました。私なりに、愛情を注い

だつもりでも、娘には伝わらなかつたのです。そんな子は、ぐれたり、反抗したりするのが普通ですが、周囲の人は口をそろえて「順子ちゃんは、素直で優しい子。あれほど心配りできる子はいない」と言ってくさるのです。

帰宅後、主人にそのことを話しました。すると主人は「親冥利に尽きるなあ」としみじみ言ってくれました。その言葉に、私は感謝と感激で胸が一杯になりました。この日ほど、母である喜びを味わったことはありません。

また、娘が中学生の時は、こんなこともありました。中学の卒業式の日、ある一人のお母さんから、私に電話がかかってきました。娘と同級生の子のお母さんでした。その方は電話口で「うちの子が中学を卒業できたのは、順子ちゃんのおかげです。不登校になっていたうちの子を励まし、助けてくれたからこそ、娘は再び学校に行けるようになりました。おかげで、今日の卒業式を迎えることができました」と、丁寧に敬礼を言ってくださいました。

あとで娘に「クラスの友達を助けたそうだね」と話したところ、「まあね。だって

友達だから」と何食わぬ顔で言っていました。このときも、親冥利に尽きる思いを味わいました。

私のような厳しい母のもとで成長し、悲しい思いや辛い思いをたくさんしてきた娘が、横道にそれることなく、まっすぐ育ってくれたのは、やはり神仏や家族のおかげだと思っています。私は、夫には女冥利に尽きるほどの愛情をいただき、娘からは親冥利に尽きる喜びをもらいました。つくづく、神に手を合わさずにはいられません。

その後も、母と娘らしいことはほとんどしてきませんでしたが、ふと、親子の絆を感じる出来事がありました。娘の友達の母親が、若くしてこの世を去ったときのことです。葬儀から帰ってきた娘は、私にこう言いました。

「生きていてくれてよかった」

それまで何度も死にかけ、命が危ないと言われてきた私を、娘はたびたび目にしていきます。だからこそ、母親が生きていてくれることの尊さ、有り難さを、身をもって

知ったのでしよう。

注射のシヨック症状で倒れたときも、夫は私を心配してすぐに駆けつけましたが、娘だけは、平然として自分の部屋で勉強していたそうです。「お母さんなら、きっと大丈夫」と落ち着き払い、私の生還を確信していたそうです。不思議な母子の縁というものを感じます。

そんな娘が、のちにどのような道をたどるのかは、もう少しあとでお話しようと思います。





第十三章

道場の広がり



私が半身麻痺になった翌年の昭和六十二年、夫が得度しました。法名は「しゅうほう修法」。副主管として、太魂院を支え、運営していく立場になりました。

夫はこれまで、私が出向く行に幾度となく付き合ひ、一番身近で太魂院を見守ってきた人です。そんな夫が、私と結婚して十五年も経ってから得度したのは、神から「杖となれ」との啓示があったからです。

注射のショック症状から生死の境をさまよい、一時は命を落とすことも覚悟した経験から、私は、自分に万が一のことがあっても、太魂院が安泰なよう、もう一人、宗教団体の代表となれる人物を決めておかなければ、と思うようになりました。幸い夫は、私のしてきたことをすべて目にし、さまざま苦難や奇跡とともに味わってきました。神の力を目の当たりしてきた生き証人とも言えるでしょう。

誰かが得度するときは、いつにも増して厳しい行に臨みます。その年の冬は特に寒く、よく雪が降っていました。麻痺を起こした私の体に、その寒さは骨に響くくらいこたえました。でも、神に夫を認めてもらい、得度にたどり着くためには、そのつら

さ乗り越えなければなりません。

昼には山の行、夜には護摩の行をおこなう。そんな日々が続きました。ほんの十分、眠ればいいほうでした。そうした経過を経て、夫は得度したのです。

月日は過ぎ、半身麻痺のときに行に同行し、身の回りの世話をしてくれた俵さんが結婚。同じ年の平成四年、大阪市東住吉区の山坂二丁目に、四階建ての新しい道場が完成しました。

この道場は、吉松外科という病院の跡地に建った、宗教法人にふさわしい建物でした。ここでもいろいろな出来事があったのですが、それをお話する前に、この道場が完成するまでのいきさつについて、ご説明しておきます。

昭和五十二年、自宅の床が抜けたのを機に、現在の自宅のある場所に、道場をいったん移しました。このとき、宗教団体としての基礎が出来上がり、その七年後、公私を分けるために、二十坪ほどの道場を大阪市東住吉区の田辺に新たに開きました。

宗教法人になり、信者の方々がだんだんと増えるに従い、記念行事や法要の時には、道場は人で埋め尽くされるようになりました。階段を上ったり下りたりするときも、人がすれ違うので精いっぱい。私はこの様子を見て、このままだと事故が起きてしまうかもしれない、と思いました。もっと広い道場に引越す必要が出てきたのです。

ちようど、開堂三十周年を迎えようとしている時期でした。三十周年には、大きな行事も行われます。遠方に住んでいるため、普段は道場に足を運べない信者の方々も、このときばかりは集まってきます。そうなったとき、何かアクシデントが起きてしまわないか、心配だったのです。

私はまず、土地探しから始めました。東住吉区は、大阪の中心部から少し離れたところにある町ですが、都心に近いこともあり、地価は決して安くありません。できるだけ駅に近い場所のほうが、遠くから集まってくる信者の方々にとっては便利ですが、駅周辺というのは地価が非常に高く、とても手を出せる値段ではありませんでした。

そんなとき、私のもとに、南田辺の駅前にある病院の土地が空いている、という話が舞い込んできました。本当に駅から近く、徒歩一分くらいでたどり着ける絶好の立地でした。小走りすればわずか数十秒。これなら、雨が降っていても、信者の方々はあまり濡れることなく、駅と道場を歩き来できると思いました。

その土地は六十坪近くありました。聞けば、以前はとても高額な地価がついていたのですが、それが値下がりし、いまが買い時、という状態になっていたのです。ですが、いくら値下がりはいいえ、土地をかうだけで億単位の大金が必要でした。普通なら二の足を踏んでしまうところでしょう。

ところがある日、神から「その土地を買いなさい」とのお知らせがあったのです。お知らせがあったということは、一見不可能に見えても、きっと道がどこかにあるということです。

お知らせがあったあと、信者の一人が、自分がお金を用立ててくると申し出てくれました。しかし、いくら用立ててくれると言っても、百万円、二百万円の話ではあり

ません。そう簡単に融通できるものではありませんでした。

お金の工面をどうしようか、考えあぐねていたとき、思ってもみない訪問者がありました。突然、一人の銀行員が自宅を訪ねてきたのです。その人は、銀行の支店長を務めていました。支店のトップが直々に私を訪ねるなんて、と驚きましたが、それよりもさらにびっくりするようなことが起こりました。支店長が私に、「先生、道場の土地を買うための融資を、ぜひうちにさせてください」と申し出られたのです。

どうして支店長は「融資をさせてほしい」と言ったのでしょうか。実は、その支店長は、二十年前、外回りの銀行員として、私のもとを定期的に訪ねていた人でした。そして支店長に出世したあと、偶然にも南田辺に戻ってきて、私が道場を建て替えようとしていることを小耳にはさみ、わざわざ訪ねて来られたのです。

「私は先生のことを、この二十年間見てきました。先生は間違いない人です。ですから、太魂教会という宗教団体ではなく、先生個人を信用して融資をしたいんです」支店長はそう言ってくれました。そして、すぐに銀行の本店にかけ合い、土地代を



借りられる手はずを整えてくれたのです。

これはあとで聞いた話ですが、この銀行の本店にも、私を知っている人物がいたそうです。銀行は、お金を貸す相手を慎重に見極めて、この人なら絶対に大丈夫だ、という相手にしかお金を貸しません。それに、億単位の大金を、普通は個人に貸し出したりはしません。その人が返済できなくなったとき、銀行側が大変な損をするからです。

私の場合も、支店長だけが太鼓判を押してくれたとしても、本店の幹部が反対したら、融資を受けられなかったと思います。ところが、本店の幹部の一人もまた、「あの先生なら大丈夫だ」と信用してくださったのです。

こうして、私は無事に融資を受けることができ、駅から徒歩一分という、願ってもない土地を買うことができました。

自宅も道場もそうですが、私はこれらを買うとき、手元にまとまったお金があった

試しがありません。いつも、まったくお金がないのに、人のご縁によって大金を借りることができるのです。しかも、家族や親戚ではなく、親族以外の方々が私に手を差し伸べてくださるのです。

結婚当初に家を買ったときも、見ず知らずの不動産業者の社長が、「若いのがんばっているから」と言って、わざわざ銀行に定期預金をし、私たち夫婦がローンを組めるようにしてくれました。私はその恩に報いるために、欠かさず借金を返済し、全額返しきりました。そして今度も、二十年前にお付き合いのあった銀行員が、出世して支店長となり、お金を融資できるよう動いてくれたのです。

このように、お金がなくてもお金を回すことができるのは、ひとえに神のおかげです。決して私の力ではありません。家を建てるお金も、新しい道場を建てるお金も、すべて神から預かったものなのです。

人が悩み、苦しむものの中に「お金」があります。人はお金がなくては生きていけ

ません。お金が人を救うこともあります。しかし、お金によって命を落とすこともあれば、人生を狂わせてしまうこともあります。そのくらい、お金は重要なものです。

でも、今の世の中を見ていると、いつも「お金、お金」と金銭を追い求めるがために、お金の操られ、お金にとらわれている人が多いような気がします。

お金は何のためにあるのか、もう一度考えてみましょう。自分の欲望を満たすためでしょうか？札束を振りかざして、人に自慢するためでしょうか？そのどちらでもないと思いません。

お金は、誰かのために思い、我欲を捨てた時に、自分のもとへと巡ってきます。「自分だけがいい思いをしたい」と思っているときは、不思議とお金は寄りつきません。ですが、誰かのために何かをしたい、人を喜ばせたいと思ったとき、予想もしない形で巡ってきます。そして、価値あるものを得るだけの額が、きちんと用意されるのです。私は、新しい道場を、世間体や自分のために建てようとしたのではありません。信者の安全と利便性のために作ろうとしたのです。そのことが、大金の融資を引き寄せ

たのだと思っています。

道場は、太魂院の信者の皆様にとつて、大変価値あるものです。ここに集い、手を合わせることで、功徳を積み、素直な心を取り戻すことができます。功徳を積みあげ、幸せが訪れます。その幸せが新しい幸せにつながり、広がっていきます。道場とは、そうした「幸せの輪」を紡いでいく、かけがえのない場所なのです。銀行が融資してくれたお金は、そうした場を作るための「生きたお金」だったと思います。

お金は、使うものではなく、生かすものです。そして、お金を生かせるかどうかは、人の心次第です。我欲を捨て、人のためになることを一心に目指す。そうした生き方をしていると、お金は自然とついてきてくれるものです。私は、新道場を建てる時、そのことを、身をもって教わったのです。

土地を買い、その上に建てる道場の建築費も、支店長が融通してくれました。当初は土地だけ買って、建物はずつとあとに建てるつもりだったのですが、支店長が「自

分がお金を借りられるよう段取りするから、ぜひ建物も建ててください」と申し出てくださったのです。土地、建物を合わせると、大変な額の借金でしたが、おかげさまで、平成四年十月、駅から近い、信者の皆様にとって大変便利な新道場が完成しました。

このとき、私は銀行から融資を受ける条件として、自宅と自分の財産のすべてを抵当に入れていました。万が一、返済が滞れば、家を差し押さえられ、家族が路頭に迷います。そんなときのために、道場の四階には、住まいの代わりとなるようなささやかな空間も用意しました。

ただ、私自身は、全財産を失つてもいいという気持ちでした。家族も、そんな気持ちを理解し、快く受け入れてくれました。私は、少しでもお金を節約するため、手元にある物を大切にし、できるだけ長く使うよう心がけました。そうすれば、新しい物を買わなくてすみ、無駄な出費を抑えられます。

大きな事業を行うと、とかく小さなお金をないがしろにしがちですが、小さなお金を大切にできない人のもとに、大きなお金は巡ってきません。そして、信用をないが

しろにする人にも、やはりお金は巡ってこないのです。

我欲を捨て、人のためになることに欲を持つこと。そして、信用を大事にすること。信用があれば、自分はお金を持つていなくても、必要な金額が集まってきます。信用は、お金では決して買えません。そして、失ってしまうときは一瞬です。

いつも感謝の心を持ち続け、素直な心で神を崇めきる。信用は、そうした生き方の中に芽生えてくるものでしょう。新しい道場は、そのことを私や信者の皆様に教えてくれたような気がします。



第十四章

信じきる心





私がこれまで、信者の皆様にご縁返しお伝えしてきた大切なこと。それは「素直な心で感謝し、神を崇めきり、慈悲と布施の心で功德を積むこと」です。信じて崇めきることが、いかに大切か。それを体験した一人の信者、清水さんのお話をしたいと思います。

清水さんは、私が注射のショック症状で倒れたとき、夫とともに病院に駆けつけてくれた信者です。医師の資格を持つ、医療に精通した人です。私は、清水さんが小学生のころから知っています。この本の四章で、小学生の子を持つお母さんが、わが子がモーターボートの事故に遭う夢を見た、という話をしましたが、そのとき、一所懸命に拝むことで、モーターボートの事故を免れたお子さんこそ、清水さんです。

以来、信者として、長年にわたって太魂院を支えてきてくれましたが、あるとき、そんな清水さんに、命に関わる一大事が起きました。いつのころからか、清水さんがしきりに「寒い、寒い」と言うようになりました。普段は暑がりなのに、なぜか寒さを訴えるのです。私は清水さんに「一度病院で検査してもらったほうがいい」と勧め

ました。清水さんはその忠告を聞き入れ、知り合いの病院を訪ね、詳しい検査を受けました。しかし結果は「どこも悪くない」。まったく異常なしということだったそうです。

でも、寒気は収まりませんし、息苦しささえ感じるようになりました。数カ月後、再び検査を受けたところ、やはり「異常なし」という結果が出ました。担当の医師は、体ではなく、心に問題があるのではないかと疑ったのでしよう。清水さんに「精神科にかかってみては」と勧めたそうです。

実はこのとき、私はすでに、清水さんの体に異常が起きていることに気づいていました。清水さんは、ガンでした。だから「検査をしてもらったほうがいい」と言ったのです。ところが、検査を受けてもガンだという診断が出なかった、ということを知り、「これはおかしい」と思い、清水さんに思い切つて本当のことを打ち明けることにしました。清水さんは医師なので、自分の病気をしっかりと受け止め、向き合えると思つたのです。

「あなたはガンですよ。病院で、改めて胸から下を調べてもらいなさい」

その言葉を聞いた清水さんは、顔面蒼白になりました。まだ三十代後半の若さだったこともあり、さすがにショックだったのでしょう。しかし、すぐに再検査を受け、胸から下の臓器を調べてもらったのです。

私が「胸から下」と言ったのには、わけがあります。清水さんは、肺を患いやすい家系に生まれたため、自分の体調不良に気づいたときも、「きつと肺に関する病気だろう」と思い込み、胸部しか検査していなかったのです。だから「異常なし」という検査結果しか出なかったのです。

清水さんは検査後、すぐに私のもとへ電話をかけてきました。そして、こう話しました。「先生、おっしゃった通り、ガンでした。胃に、卵よりも大きい腫瘍が見つかりました」。

清水さんは、かなり進行した胃ガンだったのです。検査をした医師からは「余命三カ月」と宣告されたそうです。病状が想像以上に深刻であり、一刻の猶予もならない

ことを、清水さんは悟ったのでしよう。自分の体が医学的にどんな状態にあるか、よく理解していたと思います。

しかし清水さんは、病院には入院しませんでした。私に頭を下げて「抗がん剤は飲みません。私は信仰で病気を治したい。ですから先生、助けてください」と言ったのです。

命の瀬戸際に立たされている状況にありながら、清水さんは、入院ではなく、信仰を選んだのです。私は、何としてもこの願いを聞き届けてあげたい、と思いました。

「分かりました。万が一のときは、奥さんの面倒はこちらで見ます。だから、もしも  
のときは、笑ってあの世に行きなさい」

私はそう言って、清水さんのために滝の行をすることにしました。

滝は、信仰に生きる者にとつては非常に有り難いものですが、反面、計り知れない厳しさをもつものでもあります。単に水に身を打たれるのが、滝行ではありません。体中に染みついた因縁やアクを洗い流し、身も心も清めるのがお滝の行です。

滝は、不思議な力を持っています。功德を積む人には貴重なお知らせをもたらしてくれますが、侮っている人は、逆に滝に吊るし上げられることもあるのです。滝に足を踏み入れる時には、そのくらいの覚悟を持つ必要があるのです。

滝の流れに身を投げ、行を重ねていたある日のこと。私は滝の中に、あるものを見ました。それは、うさぎやミンクの毛のようにフサフサした、小さな動物のようでした。しかし、それこそが神からのお知らせだったので。私は「助かった！」と思いました。ガンは悪性の細胞なので固いのですが、フサフサとやわらかいものが出たということは、固いガンが消え去り、病が治るといふ暗示なのです。

その後、清水さんのガン細胞は消え去り、腫瘍はまだ体の中に残っているものの、悪性ではなくなりました。いつ亡くなってもおかしくないくらい悪化したガンでしたが、信仰の力によって、清水さんは生還したのです。

私は清水さんが若いころ、一度、こう聞いたことがあります。

「信仰を、どう思いますか？」

ちようど医師の国家試験に合格し、医師免許を手に入れたばかりのころでした。科学の力で人を治療する医学に対し、信仰は非科学的なものと思なされがちです。だからこそ、科学の世界で学んだ清水さんが、改めて、信仰をどう考えているか、聞いてみたかったのです。

すると清水さんは、こう答えました。

「信仰の中に、医学があります」

医学は、人の編み出した一つの技であり、信仰を超えるものではない。むしろ、信仰があつてこそその医学なのだ。そう言いたかったのでしょう。

私は、この言葉には大変深い意味があると思います。

信仰は、目には見えません。しかし、神の存在を信じ、崇めきつたとき、神はその思いに答えてくださいます。そして、頼られれば頼られるほど、力を發揮してください。心から神を信じ、感謝の気持ちを持って拝めば、その願いをしつかりと受け

止め、幸せをもたらしてくれるのです。しかし、信じる心があまり強くなければ、願いが届く力も弱くなります。

清水さんはガンという病にかかり、余命三カ月という絶望的な状況に置かれました。しかも、前々から検査をしていたにもかかわらず、ガンの発見が遅れてしまったのです。しかし、そんな自分の立場を恨まず、嘆かず、素直な心で信仰に打ち込むことで、ガンを克服したのです。清水さんが助かったのは、清水さんの中にある「神を信じきる心」のおかげなのです。

私は決して、医療を否定してはいません。医療で治るものであれば、きちんと医者にかかり、治してもらってほしいと思っっています。でも、神の力でなければどうにもならないことも、この世にはあるのです。

清水さんはその後、私に「これからは信仰一本で生きたい。ぜひ弟子にしてほしい」と頼んできました。しかし、弟子はとらないと心に決めていた私は、清水さんにこう



言いました。

「私の弟子になるのではなく、神からいただいたその命を、医師として人を助けることに使いなさい」

三年後、清水さんは、自分の医院を開業しました。いま、得度して教師という立場になり、相変わらず太魂院を支えてくれながら、一人の医者として、地域の人々の健康を守っています。

第十五章

開運の神「うんこどうじ運子童子」の誕生



五十代を迎えたころ、私の中に、ある思いが広がるようになりました。これまで、生死をさまよう体験を何度もし、命が尽きるかもしれないという出来事に遭遇してきた私は、もし今後、自分が天に召されるようなことがあったら、苦しんでいる幾多の方々をお救いできなくなってしまう、と思ったのです。私がいなくなった後も、人々を救う道はないものか。そう考え始めました。

同時に、信者の皆様だけでなく、信者でない方や、太魂院を知らない方にまで、心の救いを感じていただけるものを残したい、という気持ちが強くなりました。太魂院という限られた範囲ではなく、もっと広い範囲の方々を幸せにお導きしたい、という思いが沸き上がってきたのです。

ですが、具体的に何をして良いのか、思いつきませんでした。仕事を通じて、お一人お一人を救うことはできましたが、世の中の多くの人を幸せにするために何をすべきか、分からなかったのです。

そんなある日のことでした。太魂院の副主管である浅田修法が、ある不思議な夢を

見るようになったのです。

その夢は、次のようなものでした。聡明で健康的な少年が、ビルの谷間をさつそうと駆け抜けているのです。そして走り去ったあとには、まるで足跡のように、ウンコが連なるように落ちていきます。この奇妙な夢を、修法は何度も繰り返し見たのです。

この夢には、意味がありました。元来、ウンコの夢は、幸せを呼ぶ吉夢とされています。しかし、良い夢はいろいろな人に話して回るものではなく、どちらかといえば、自分の胸に秘めておくもの、というのが一般的だと思います。しかし、あまりにも繰り返し訪れる夢に、修法も「これには何かある」と思ったのでしよう。私に「最近、こんな不思議な夢を見る。夢に出てくる男の子をお祀りすべきではないか」と話してくださいました。

それなのに、私は当初、その話を軽く聞き流してしまっていたのです。修法の夢に出てくる男の子がどんな姿なのかよく分かりませんでしたし、何より、それが神からのお知らせなのかどうか、半信半疑でした。

それから何カ月か経ったころ、修法の夢に出てきた男の子が、ふいに私の前に姿を現したのです。拝んでいるとき、金太郎のような格好をしたふくよかな男の子が、手に小判の入った巾着を持って立っている姿が見えたのです。そしてその足元には、ウソコがありました。

男の子は、太魂院の主神である「秋津天御親太御魂あきつあまみおやふとみたまのおおかみ大神」の分身だったのです。このときになって、私はようやく「この男の子をお祀りしなければならぬ」と思ったのです。

私は仕事の合間を縫って、男の子のお姿を形にしてくださいと頼む仏師を探しました。遠く富山県まで探し回りました。何しろ、これまでに見たこともない、まったく新しい像を作るのです。

仏師は見つかったものの、どんな像を作ってほしいかを伝えるのがひと苦労でした。普通の仏像なら、お手本となる形がありますが、このときばかりは、参考とするもの

が何もありません。頼りは、拜んでいる時に私が見た、あのお姿だけです。修法の夢にも出てこられはしたものの、像にするような立派なお姿を目にしたのは、私だけです。

無から形あるものを作るというのは、とても大変な作業でした。私はあの手この手で、仏師に像のイメージを伝えようと思いました。

しかし、それよりも大変だったのは、行でした。修法が得度したときもそうでしたが、新しく何かが生まれるときは、私たちも行の中で“生みの苦しみ”を味わいます。私は、とても厳しく、そして長い行を重ねていきました。

何よりもつらかったのは、当時まだ二歳だった孫の容態です。そのころ、孫は血便が続き、あばら骨が見えるほどやせ細っていきました。孫の命を、神にとられるのではないかと思っただけです。

新たな像を作るとは、そのくらいの困難を伴うものなのです。多くの人の救いとなるような、いわば神の分身をこの世に生み出すのですから、相当の覚悟を持って臨ま

ねばなりません。とはいえ、だんだんと弱っていく孫の姿を見るのは、一人の祖母として精神的につらく、心を引き裂かれるようでした。

苦しい行を重ねながら、像のお姿について何度も打ち合わせをし、まだ誰も見たことのない、太魂院だけの神を作っていました。そしてついに、ぽつりとした体で元氣そうに笑う、見ただけで幸せになれそうな童子様の像が完成したのです。

ですが、その像は、まだ完全ではありませんでした。勧請前になっても、お名前が出てこないのです。それは、ある夜の行のときでした。ようやく、神から名前の啓示があったのです。像の名前として示されたのは「運子<sup>うんこ</sup>」。夢の中で男の子がたくさん残っていたウンコと、運を運ぶ子、という意味が掛け合わされたものでした。私はその名前のかわいらしさとユニークさに、思わず微笑んでしまいました。

こうして、像は「開運の神 運子童子」と命名されました。運子という名前は、開運の神にだけ付けられるものです。多くの人を幸せにしたいという思いが、「開運の像」



として、形となつて成就したのです。これほどうれしく、幸せなことはありません。

運子童子様をお祀りする場所の啓示もありました。童子像は、太魂院道場の敷地内であり、人通りの多い道に面した場所に、一心堂という祠を建て、お地藏様のように外に向けて安置することにしました。そこは、駅から行き来する人が毎日たくさん通る、とても目に触れやすい場所でした。通勤や通学するとき、ちよつと手を合わせて通り過ぎるにはちようどよいところでした。

平成十五年、運子童子様は、町の皆様に親しんでいただける神として、その歴史を刻み始めました。そして、建立当初から、道行く人の評判となりました。男の子の像の下に、金色のウンコが光っているのです。見たこともないようなお姿に、誰もがびっくりしたのではないでしょうか。

ですが、運子童子様は、地元の皆様にはとても好意的に迎えられました。そのころ、道場のある山坂二丁目という地域には、お地藏様がありませんでした。信心深い人が手を合わせようにも、拜む場所がどこにもなかったのです。そこに、運子童子様が祀

られたので、人々は「町を守ってくれる神」として、とても喜んでくださいました。

その後、運子童子様に手を合わせた方々に、次々と幸運がもたらされるようになりました。就職難によって働き口がなかなか見つからなかった人に、良い就職先が見つかったり、男女の良縁が結ばれたり、とてもおめでたいことが起こり始めたのです。うれしかったのは、信者ではありませんが、何かにつけて運子童子様に手を合わせていた人や、小学生のお子さんにまで、幸運の輪が広がっていったことです。野球の試合でホームランを打てた、持病があっても明るく過ごせるようになったなど、たくさん喜びの声、私のもとに聞こえてくるようになりました。

運子童子様をお祀りするようになって以来、太魂院では、毎年八月下旬の日曜日に、運子童子年祭法要夏祭りを執り行っています。単に祈祷を行うだけでなく、運子童子様の祭典として行う、年に一度のにぎやかなお祭りです。

このお祭りは、太魂院にとって、とても大切な意味を持っています。慈悲と布施の

真心で行う開運のお祭りであるため、信者の方々が縁日の屋台を出し、地域の皆様をおもてなしするのです。つまり、太魂院と地域の人がご縁を結ぶ日なのです。

この日のために、信者は一丸となって準備をします。そして、夏祭りに遊びにやってくる方に、お菓子やかき氷などを無料で振る舞います。夏祭りは、太魂院が、地域の方に喜んでいただく「外に向けた布施」の催しです。楽しいだけのお祭りではなく、来ていただいた方に、ひとときの幸せと楽しみを味わっていただくものなのです。

一つの宗教団体が世に認められるためには、とても長い時間と多くの努力が必要です。特に、宗教団体がつまはじきにされがちな現代社会では、何もやましいことがないのに、疑われる場合もあります。

しかし、かわいらしいお姿をした運子童子様のおかげで、太魂院は、少しずつ、自然な形で地域に溶け込むことができたのです。

運子童子様が生まれて十年経ったころには、十周年記念の盛大な稚児行列を行います

した。稚児たちが通りを練り歩き、町は華やかな雰囲気にも包まれました。運子童子様が多くの人に親しまれていることを示す、うれしい式典となりました。

そしてその翌年、さらにうれしい出来事も起こりました。平成二十六年、老朽化し始めた山坂二丁目の道場を取り壊し、同じ場所に新しいお堂を建設することになったときのことでした。この建て替えについては、またあとで詳しくお話ししますが、このとき、建て替えによる古い建物の取り壊し時期が、ちょうど夏祭りの開催時期に重なってしまったのです。

お祭りを行うには、テントを張り、人が休憩する場所を確保しなければなりません。その場所がなければ、お祭りを開くことは難しくなります。そのため、多くの信者の方々は、「今年の夏祭りは開催できない」と思っておられたようです。

しかし、私は「必ずできる」と信じていました。夏祭りは、十年以上にわたり、毎年欠かさず行ってきた大切な年祭です。運子童子様に感謝し、地域の方と触れ合う大切な機会を、建て替えによって中断するわけにはいかないと思ったのです。規模を大

幅に縮小しても、法要だけは必ず行おうと心に決めていました。

すると、喜ばしい情報が舞い込んできました。太魂院の総長が「駅前広場が借りられるかもしれない」と教えてくれたのです。それだけではありません。何と、地元商店会のほうから、「私たちと合同でお祭りを開きませんか」と申し出てくださったのです。今の時代、小さな宗教団体と商店会がいつしよになつてお祭りを開くなど、ちよつと考えられないことです。ですが、その世にも珍しいことが起こったのです。

こうして、夏祭りは無事に開かれました。お祭りの最初には、商店会の会長とともに鏡開きを行い、縁日を無事に迎えられたことを感謝しました。お天気も上々で、会場にはたくさんの方が詰めかけてくださいました。太魂院からは、ラムネやスマートフォンなどの出店を構え、無料で地域の方に振る舞わせていただきました。地域の皆様、信者の方々の笑顔でいっぱいとなる、これまでにないにぎやかな夏祭りとなりました。

運子童子様が生まれるまで、太魂院は、信者の方々が集まる“心のよりどころ”で

した。しかし、一心堂ができ、運子童子様が地域の方々との架け橋となつてくださつたおかげで、太魂院は、地域の方にとつても、心のよりどころ“となる”ことができたと思います。

運子童子様は目に見えますが、本当にかげがえないのは、目に見えない「ご縁」を結んでくれたことです。おそらく、私がいなくなつたあとも、この素晴らしいご縁はずっと続いていくでしょう。神の有り難さを、つくづく実感しています。



第十六章

次へと受け継ぐ





平成十一年、娘の順子が結婚しました。このころの私は、昼は仕事、夜は行の繰り返しで、ほとんど休養をとっていませんでした。若いころなら、そんな生活を続けていても大丈夫でしたが、五十代も半ばを過ぎると、だんだんと体力が衰えてきます。私は三年続けて、寒い冬の時期にもかかわらず、ひどい寝汗をかくほど、体調を崩していました。

娘の結婚が決まったのは、そんな時期でした。体調が優れない中、せめて母らしいことをしようと、結婚に向けて精一杯のことをしました。うれしいことに、娘の夫となる人は、一人息子であるにもかかわらず、私たち夫婦の子どもになってくれるとのことでした。それにも増してうれしかったのは、先方のご両親やご家族が、とても素晴らしい方々だったことです。

私たち夫婦が先方のご両親のもとにご挨拶に訪れたときのことです。不自由に歩く私の姿を見て、ご家族は大変優しい言葉をかけ、気遣ってくださったのです。本来なら、私は邪険にされてもおかしくない立場です。なぜなら、大事な子どもさんを、浅

田家にいただくのです。先方のご両親にこころよく思われなくても、無理はないのです。ところが、ご両親は私たち夫婦を丁重に迎えてくださり、両家をご縁を結ぶことを、心から喜んでくださったのです。

私はこのとき、先方のお父様がおっしゃった言葉を、いまでも忘れることができません。

「息子本人が決めたことです。私たちは、息子の幸せのために、その意思を尊重します。どうか息子をよろしくお願いします」

このとき、私はご両親の深い愛情を感じ、涙がポロポロとこぼれました。ご両親は、息子を手元に置きたいという気持ちを抑え、ただただわが子の幸せを思い、その手を離す決心をされたのです。これほどの愛情があるものかと、体が震えるほどの感銘を受けました。私はご両親に対し、心から感謝を申し上げ、二人の結婚の準備を万端に整えていきました。

結婚式は、六月二十日に決まりました。この良き日、私たちは親族だけで式を執り

行いました。とても和やかな、幸福感に満ちたお式でした。両家の親族が欠けることなく集まり、心の底から二人の幸せを願い、祝いました。修法の母などは「人生でこんなに楽しいのは初めてだ」と言っただけです。

その二十日後、今度は信者の皆様に、娘夫婦をご披露しました。私は五十七歳になっていました。

順子が得度し、「芳順」という法名をいただいたのは、二年後の平成十三年十月二十日のことです。

この本ですでお話したとおり、娘の順子は、宗教家の私のもので、寂しい思いをしながら成長しました。鬼のようにしつめに厳しかった私を、実の母親とは思えないと感じ、そのつらさに耐えながら過ごしてきた娘です。普通の母親のように、あふれるような愛情を示さない私に対し、どこか複雑な感情を持っていたと思います。その娘が誰に勧められるでもなく、私と同じ道に進むことを自ら決意したのです。

順子は、昔から変わったところのある子でした。突然不思議なことを言ったり、誰もいないところを見て「あそこに人がいる」と言ったりと、他の人には分からないところが、順子には分かったようです。神に「一人だけ子を授ける」と言われ、二歳から行を続けてきた、信仰の道に進む資質が、どこかに備わっていたのかもしれませんが。

私が五十八歳のとき、順子は第一子を出産しました。その後、二人目がお腹にいるとき、得度しています。

この得度の時にも、ある出来事がありました。得度の行は、生半可なものではありません。娘は身重の体でありながら、その行に耐えきったのです。しかし、得度を終えた一週間後、娘の体に異変が起きました。深夜、「トイレが真っ赤に染まるほど出血したから、病院へ行く」と私のもとに電話がかかってきたのです。当時妊娠二〜三カ月だった娘は、切迫流産しかけていました。

しかし私は、病院に行ってしまうえば、赤ちゃんの命はないと思いました。病院に行けば、必ず内診があります。しかし、それでは余計に出血すると思ったのです。私は

電話口で、病院へは行かず、自宅で絶対安静にすることを娘に勧めました。神におうかがいしたところ「命はある」とのお知らせがあったからです。赤ちゃんは生きていくという確証を得た私は、絶対安静こそが、母子ともに助かる道だと考えたのです。

同時に、神からは「イチゴ」のお知らせがありました。つまり、お腹にいる子は、イチゴの季節に生まれる女の子、という意味でした。

安静のかいあって、娘の第二子は、神に告げられた通り、イチゴが旬を迎える六月、無事に誕生しました。流産の危機に遭ったとは思えないほど、いま、元気に育っています。

私の子育てをわが身で体験した娘には、「自分の子どもには、自分と同じような寂しい思いはさせたくない」という思いがあったようです。私のように、あえてわが子突き放すようなことはせず、世間にいる優しい母親と同様、子どもと向き合い、触れ合いながら子育てしています。

ただ、母親となったことで、娘は私の気持ちをさらに理解してくれるようになった

と感じています。おそらく、私を誰よりも理解しているのは、娘の順子、芳順に他ならないと思っています。

私は神から、娘をたった一人だけ授けると言っていたきました。しかし芳順は、第二子に続き、第三子も授かっています。思うに、太魂院の信仰をのちの世に残していくために、神が孫の存在を必要とされているのでしょうか。

孫たちもまた、不思議な出来事のもとに生まれ育っています。まず第一子は、まだお腹の中にいるとき、流産の危機に遭っています。私が神におうかがいしたところ、急流に流されるいかだの上に、大人と子どもが乗っている様子が知らされました。いかだはふぞろいの木を組み合わせた不安定なもので、いつひっくり返ってもおかしくない状況でした。しかし、いかだの真ん中に乗っていたため、私は「いまは母子とも危険な状態だが、きつと助かる」と確信しました。結局、第一子は、私の父から見えて、ほぼ百年ぶりの男子誕生となったのです。

この子は、生まれたあとも、予言にも似た言葉をしばしば口にしています。芳順に第三子ができたとき、まだ男の子か女の子か分からないのに、「弟ができる」と周囲に言って回っていました。そして、その子の名前が「けいすけ」であることも言い当てています。私は第三子の誕生時、神に名前をうかがっているのですが、それがまさしく「啓助」という漢字でした。

私の目の黒いうちに直々に修行をつけようと、幼稚園のときは、一週間の行を三年にわたって行いました。このときも、友達や幼稚園の先生に「山に行く」とは言わず、「仕事に行く」と言っています。太魂院を受け継ぐ心構えが、自然と備わっているのだと思います。

第二子は、さきほどお話したように、切迫流産の危機を乗り越えて生まれてきました。第三子も、本来なら授かるはずのない子でした。あとで知ったことですが、芳順は以前から、子どもができにくい体だと医師から告げられていました。一人授かっただけでもまれなことなのに、三人もの子に恵まれるなど、まさしく奇跡的なことでし



た。

平成二十二年、私が初めて山の行を行ってから、五十八年の歳月が流れていました。この年の春、私は「自分がガンになる」という体験をしています。

年祭が終わったあとのことでした。私はいつものように、年祭が無事に終わったことを感謝するため、神に手を合わせ、お礼を申し上げました。すると、神棚に位牌が表れたのです。その位牌は、普通の位牌よりもずっと大きく、高さ七〇センチ、横幅二〇センチくらいはありました。縁は金で彩られ、猫足の台座がついた非常に立派なものでした。

これを見たとき、私は「あつ！」と思いました。位牌は、人の死を意味します。道場の神棚にそれが現れたということは、道場の関係者が亡くなるということです。しかも、普通では考えられないほど大きく、立派なものです。失礼ながら、これだけの位牌に当てはまる人物は私しかいない、と思いました。

私はすぐに、このことを家族に話しました。すると、芳順はすぐさま「今晚から行をしよう」と父である修法に進言し、行を始めてくれました。

その日を境に、私の体調はどんどん悪化していききました。普通ではありえないくらい体がしんどく、起き上がることができないのです。ですが、仕事と行だけは休まず、ずっと続けていました。

念のため、医師である清水さんに付き添ってもらい、病院で血液検査を受けたところ、驚くべき結果が出ました。なんと、ガンの有無を調べるがんマーカーの数値が、末期がんの患者さんと同じくらい高かったのです。検査結果を見たとき、清水さんの顔色が変わったくらい、非常に高い数値でした。検査をした医師からも「初診で来られた方で、これほど高い数値が出たのは、あなたが初めてです」と驚かれました。

ガンがどこにできているかを確かめるため、エコー、CT、MRIなどの画像検査も行いました。ところが、画像にはガンは一切映らないのです。あれだけ高いがんマーカーの数値が出ていると、ガンがあちこちに転移し、その痛みで転げ回っているのが

普通だそうですが、そうした症状もありません。体がしんどいという以外は、何の痛みもないのです。

医師は、この検査結果を見て、「きつと膵臓ガンに違いない」と言いました。膵臓ガンは非常に見つかりにくく、なかなか画像に映りません。ありとあらゆる検査をしたのに、ガンが見つからないということは、膵臓ガンしか考えられないと医師は思ったのです。そして「膵臓ガンなら、痛みはこれから出てくる。病室のベッドを空けておくので、いつでも入院してください」と私に告げました。

結局、私は入院しませんでした。休まず行に励んでいたため、その後も私の体に痛みが出ることはなかったのです。

半年後、がんマーカールの数値は、半分にまで下がっていました。そして一年後には、まったくの正常値に戻りました。末期状態にあったガンが治ったのです。これは、娘と夫、清水さんによる必死の行、そして私自身がおこなった行の力、神の力のおかげだと思っています。

ガン体験の数カ月後、私は神から、予想もしていなかったお知らせをいただきました。私が勝森先生とともに厳しい行を始めた八月二十八日を「入山記念日」とし、毎年家族で山に入り、お礼参りの意味も込めて、滝の行に励んでいました。そのとき、滝の中で「弟子をとれ」とのお知らせがあったのです。

それまでも、神からいろいろな啓示がありましたが、「弟子をとれ」との言葉には、正直、戸惑いました。弟子は生涯とらないと、心に決めていたからです。

私になぜ、生涯弟子は取らないと決めていたのか。その理由については、第九章ですでお話ししています。ですが、ここで改めて、弟子になるとはどういうことか、人を救う道に入るとはどのような意味を持つのか、お話ししておきたいと思います。

神の使いとして、苦しみ悩む人を救う道は、つらく、険しいものです。自分の幸せは捨てても、他人の幸せのために生きていかなくてもなりません。それに加え、経済的な困難も生じてきます。この道で食べていくのは非常に難しく、何年も苦しい生活が続くこととなります。その苦勞にどこまで耐えられるか、まさに自分との戦いで

す。私自身、ようやく食べていけるようになるまで、数年もかかっています。

お金の苦勞が、人を変えてしまうこともあります。自分や家族を養っていくために、お金を出してくれる人に媚びを売るようになるのです。最初は人を救うために仕事を始めたのに、いつの間にか儲けに走ってしまった人を、私は何人も見てきました。

自分自身を磨くため、弟子になる前とは比べものにならないほど厳しい行を重ねる必要もあるでしょう。心が二つに裂かれるような精神の葛藤、体を酷使する行を、数え切れないほど体験していくのです。精神の行、肉体の行、金銭の行に、何年も耐え抜かねばなりません。宗教家として一本立ちするまでに、おそろくどん底の生活を味わうことと思います。

それが目に見えているのに、私以外の人をこの道に巻き込んでいいのかという葛藤が、長年私の中にありました。しかも、本人だけでなく、その家族までもがつらい思いをするので。そんな経験を弟子にはさせられない、と思っていたのです。

それに、信仰の世界は、理屈ではありません。頭で理解するものではなく、心と体

に刻み込むものなのです。どれほど口で立派なことを言おうとも、それが上っ面だけのものであることは、神にはすぐに分かります。

行に慣れてくると、人の中には「自分はここまでできる」といったおごりやプライドが生まれてきます。それが、神仏を崇めきる心を邪魔します。小学生のころ、私は師匠にどれほど理不尽なことを言われようとも、文句一つ言わずに従いました。それは、師匠を「命を救ってくれる人」と信じていたのと同時に、神を心から信じきっていたからです。神は必ず見てくれているとの思いが、厳しい行に励む力となっていました。

神は、人の心しか見ません。形だけ取り繕っても、それは意味を成さないので。形式的に手を合わせたり、口先で神を崇めきると言っても、心が伴っていないければ、神には通じないのです。

山に入り、冷たい滝に打たれ、夜通し護摩を焚くのも大切な行の一つです。しかし、それよりももっと重要なのが、心の行、精神の葛藤です。そうした葛藤に耐え、乗り

越えてこそ、人を救うことができるのです。

しかし、啓示があるということは、何か意味があるのです。私は下山し、信者の皆様の中から、弟子となる人を募ることにしました。

その日はちょうど、運子童子様の法要がある前日で、準備のために、多くの信者が道場に集まっていました。その席で、私は「神のお知らせによって、弟子をとることに決めました。もし弟子になりたければ、申し出てください」と呼びかけました。すると、その日のうちに、七人が「弟子になりたい」と申し出てきたのです。

この本を読んでくださっている方の中にも、私と同じ道に進みたい、と思っておられる人がいるでしょう。太魂院の信仰を受け継ぎ、次の時代へとつないでくださうとする志は、素晴らしいと思います。ですが、そんな志ある方だからこそ、あえて私はこう言います。

人を救う道は、生半可なものではありません。多くの人を苦しみから助ける仕事は、

一見、華々しく見えるかもしれませんが、裏では人に言えないほどの労苦と努力を重ねなければなりません。たった一人で、自分の葛藤と闘うのです。誰も助けてはくれません。しかし、そんな痛みを耐え抜くことができるから、人を救う道に入ることが叶うのです。

弟子入りを決めた一人に、結婚したばかりのある女性信者がいたのですが、娘の芳順は、その女性信者の決意を聞いて、とても驚いたといいます。そして「普通に暮らしていれば幸せになれるのに、なぜわざわざいばらの道を選ぶのですか。とてもつらい思いをするのに」と、ポロポロと涙をこぼしました。

しかし、その女性信者は、顔をまっすぐに上げて、こう答えました。「私は、芳順先生にお仕えるために、命をいただいたと思っています。だから、どんな苦難があろうと、弟子になりたいと思いました」。

弟子の皆さんには、これから、幾多の苦しみと試練の日々がもたらされるでしょう。でもどうか、初心を忘れず励んでください。そして、苦難を乗り越えてください。困



難に耐える強い気持ちと、慈悲の心を磨いて、たくさんの人を幸せに導いてくれることを、心から願っています。

弟子をとった明くる年の十月二十八日。四十六年前に私が天啓を受けたこの日、くす玉が割れるお知らせがありました。玉がきれいに二つに割れ、紙吹雪が舞いました。そして、次のようなお知らせがありました。

法脈は続く。

太魂院が、これからも脈々と続いていくことを告げる神の言葉でした。それは同時に、娘・芳順が二代目として神に認められた瞬間でもありました。

人を救う決意を胸に、自宅を道場にして、悩みや苦しみを持つ方々のために祈ってきた日々。その日々の中で、少しずつ信者が増え、社会に認められる宗教団体になっ

てきた太魂院が、今後もずっと受け継がれ、救いのよりどころとしてあり続けることは、非常に喜ばしいことです。私という存在がこの世から姿を消しても、太魂院は存在し続けるのです。

ですが、まるでその喜びと引き替えるように、またしても、私に大きな試練が与えられていたのです。それは、くす玉のお知らせがある直前の、暑い夏のことでした。



第十七章

だるまの行



弟子を迎え、弟子とともに百日の行に臨んでいたときのことでした。平成二十三年八月二十三日、それはうだるような猛暑の日でした。体の調子を整えるため、鍼灸院に行った帰り、両足がまとわりつき、思うように歩くことができなくなりました。私は大事をとって、鍼灸院の車椅子を借りて移動することにしました。

注射の副作用によって半身不随となり、体の左半分が動かなくなったときも、自分のことは自分でやり、自力で歩いていた私にとって、これはとても珍しいことでした。つまり、車椅子に乗ることは、普段はやらない行為だったのです。

車椅子を押してもらい、車に乗るため、地下の駐車場に到着したときのことでした。車椅子の車輪が、ふいにガレージの溝にはさまってしまっただので、そこから抜け出すために、思い切り力を入れて車椅子を押されたときのことです。その反動のせいで、私の体だけが空中に飛ばされ、三メートル先に飛ばされてしまったのです。

そのとき乗っていた車椅子は、簡易式の車椅子で、シートベルトも何もないタイプでした。私は、自動車事故ではね飛ばされたのと同じような衝撃を受け、体ごと宙に

飛ばされ、そのあと頭から地面に激しくたたきつけられました。まるで何かが上から落ちてきて、私の頭を直撃したような感覚でした。頭を打ったときの「キーン」という金属音のような音を、今でも覚えています。

急いで助け起こされ、その鍼灸院で応急処置をしてもらい、その日はそのまま自宅へ帰りました。そして翌日、病院に行つて検査を受けました。たまたま一カ月前に大病院のMRI検査の予約をしていたのが、その事故の翌日だったのです。

検査を受けたところ、頭部には異常がないことが分かりました。頭蓋骨が割れてもおかしくないほどの事故だったので、命がなくてもおかしくありませんでしたが、これといった外傷はありませんでした。しかし、首のねんざによって、私の体は、手足の麻痺だけでなく、声帯までもが麻痺を起こしてしまったのです。

医師からは、「手術をすれば手足が動くようになるかもしれない。ただし、あなたの年齢で手術を受けたら、以前のように良くなることは難しい。回復したとしても、相当の時間がかかる」と言われました。つまり、手術すらできないということでした。

全身がまったく動かず、声も出せない私は、まさに「だるま」です。腕や手は熱を持ち、肩は触られただけで痛みました。体は動かないのに、感覚だけは残っていました。私は、一人では何もできない体になってしまったのです。

しかし、注射のショック症状で半身不随となったときと同じように、私は、命が助かったことに感謝しました。あれほどの事故に遭いながら、こうして生きているということは、この世でなすべきことがまだある、そして、何か悟らなければならないことがある、ということでした。私は、神から宿題をいただいたと感じました。

私はいま、外出する時、出かける四時間前からリハビリを行い、体を動かす訓練をしています。ちよつと出かけるだけなのに、長時間の努力が必要です。しかし、家族の深い思いやりや、支えてくださるたくさんの方々がいることを、何よりもありがたいと思っています。中には、私の明るさに惚れ込んでくれて、自分の親のように、昼夜を問わず私の世話をしてくださる方もいます。東洋医学の素晴らしい先生に巡り会い、治療を受けられたことも、神のおかげだと感謝しています。多くの方が私に家族



のように接してくださる。その喜びでいっぱいです。

私はよく、皆様に「感謝は感謝を呼び、愚痴は愚痴を呼ぶ」と申し上げています。もしも私が、全身麻痺であることに絶望し、愚痴をこぼしながら毎日を過ごしていたら、これほど幸せで穏やかな気持ちにはなれなかったでしょう。置かれた状況に感謝し、自分にできる精一杯のことを行い、ないものよりもあるものに目を向けて「ありがとう」の気持ちを持てば、誰でも幸せになれるのです。

行や治療を重ねるうち、私の体は徐々に回復し、痛みは取れていきました。しかし、普通であれば寝たきりになっていたでしょう。

神仏や家族、多くの方々のおかげで、私は様々なところに外出することができます。事故に遭う前と同じように、水行に行くこともできれば、旅行や外食にも出かけることもできるのです。また、だるまになった今もお、夫、息子、娘、そして孫たちからはあふれる愛情をいただいています。

太魂院の仕事も、相変わらず続けています。そして、体が動かなくなった分、以前にも増して靈感が鋭くなっています。

私は若い頃から、水の行、火の行、そして精神の行と、自分を鍛えるさまざまな行を続けてきました。それもこれも、いつかこの身が衰え、体が動かなくなっても、皆様をお救いできるだけの法力を身につけておきたい、との思いがあったからです。私の姿を見てくださるだけで、癒しや救いを感じていただけ、そんな宗家になりました。いと願ってきました。おかげさまで、何十年にも及ぶ行のかいあって、私はだるまになつた今でも、変わりなく法力を發揮でき、靈感は鋭さを増しています。皆様のお役に立てることに、大変感謝しています。

ここ最近、私と初めて出会つた方は、私がかつて元気に仕事をし、精力的に行を行つていた姿など、想像できないかもしれません。しかし、だるまの行の最中である今でも、人をお救いしたい、苦しむ方々を悩みから解放したい、という思いは、少しも薄れてはいません。むしろ、もっとたくさんの方々に、信仰の素晴らしさを伝え、幸せ

にお導きしたいと、強く思っています。

第十八章

五十年という時を歩んで



平成二十四年、弟子の一人である清水さんが得度し、清水浄孝じじょうこうとなりました。神から「手となれ」との啓示があり、そのお役をいただいたのです。

気がつけば、道場の開堂から五十周年を迎えつつあります。私は、これからは太魂院の基盤をさらに固めていく時期だと感じていたので、まず、道場を修繕することにしました。信者の皆様の寄る辺、信仰の基盤となる場所を、きちんと整備するつもりだったのです。

ただ、信者の方々には負担をかけないように、できる範囲で、しかも無借金で済ませるつもりでしたが、業者に見てもらったところ、建物の中から朽ちていることが分かりました。

そんなとき、神から「建て替えよ」とのお知らせがありました。同時に「礎となるものを作れ」との啓示もあったのです。これは、建物だけを建て替えよ、ということではなく、すべてにおいての礎を作れ、ということだと思っただけです。何十年、何百年先になっても太魂院が続くような基礎を築きなさい、という意味です。

五十周年を迎えるということもあり、まずは道場を建て替えることにしました。古い建物を壊し、同じ場所にお堂を建設するのです。

私はこれまで、さまざまなご縁によって、何億円という大金を回し、きちんと返済してきました。このたびも、自分の全財産をすべて投げ打って、銀行から融資を受けて建て替えに臨むつもりでした。

ところが、いままでにないくらい、銀行の条件が厳しかったのです。私は、生命保険まで解約し、手元のお金をすべて吐き出し、家族もろとも丸裸になるのを覚悟の上で、全資産と、私にとつては多額の現金を担保にしました。そうすることが、融資の条件の一つだったのです。にもかかわらず、もう旧道場を取り壊しているのに、借り入れのめどが一向につかず、大きな苦しみを味わっていました。

そんなある日、車に乗って自宅を出発し、運子童子様が祀られている一心堂に向かった曲がり角を曲がったとき、一心堂が金色の社へと変貌している様子が見えたのです。ほかの建物に遮られ、まだ一心堂が見えるところまでは来ていなかったのですが、私

にはむしろまわりの建物は見え、金色の社だけが目に映ったのです。一心堂は、紫の幕、房にいたるまで、本当にすべてが金色一色でした。しかし、車に同乗していたほかの人には、その輝きは見えませんでした。私にだけ見えたのです。

これは、「どんな困難があろうとも、お堂は建つ」という神からのお知らせだったのです。しかも、一心堂の前を通り過ぎたあとも、いつまでも金色の社が見え続けるという、非常に珍しいお知らせでした。私は「いまは借り入れができなくても、いずれ必ず解決する」という信念を抱きました。そして、弟子たちと三カ月にわたって、土地を清める行をおこなうことにしました。

そして行が終わったある日、私は、非常に肥えた土地に畝がいくつも連なり、木に青々とした柑橘系の実がなっている風景を夢に見たのです。それは、建て替えの地が清められ、太魂院の礎にふさわしい、心安らぐ聖地になっていることを知らせる夢でした。この地でなら、皆様に必ず幸せになっていただけると確信しました。

お堂の建設契約は、二〇一四年の十二月に行いました。このときになっても、まだ



銀行の融資は決まっていますませんが、私は「必ず乗り越えられる」と信じ、三日月の清めの行と平行して、百日の行をおこないました。命を削るような思いで、ただ一心不乱に行に打ち込みました。

そして、暮れも押し迫った日、厳しい条件付きで、総額の一部ではありますが、ついに、銀行の融資が決まったのです。

信者の皆様のご協力も得て、新しいお堂は、予想を超える素晴らしいものになりました。まさしく、太魂院の礎となるものが完成したと思っています。

まず一階は、開放的な玄関で、大きな仏画が飾られたすがすがしい空間になっています。二階は信者の皆様が集まる広間になっています。のびのびとしたお座敷に、本格的な舞台を備えています。年祭の奉納演芸にも、熱が入るのではないのでしょうか。そして三階と四階が、それぞれ仏間、神殿になっています。

四階は、神の啓示により「てんくうでん天空殿」と名付け、非常に荘厳な総檜造りの神棚をお祀

りました。私はこの神棚を見た瞬間、「これは百年はもつ」と確信しました。丁寧  
に作り上げられた神棚には、言葉では言い表せない神々しさがありません。

三階の仏間は、同じく神の啓示により「和修殿」と名付けられ、漆塗りの仏壇をお  
祀りしました。この仏間は、大変仏間らしく、神殿とはまた異なった趣の空間となり  
ました。手間ひまかけられただけあって、深い味わいがあります。そして、芳順の願  
いにより、私の師匠と、太魂院のために力を尽くしてくださった先師先哲の霊を、共  
にお祀りさせていただきました。その方々の位牌を目にするたびに、深い感謝と畏敬  
の念を感じます。

この道場を通じて、私がいなくなったあとも、太魂院の固い基盤が残されることで  
しょう。とても喜ばしいことです。

新道場建設に先駆けた、平成二十五年の宣名祝賀法要の日。私は神から、太魂教会  
から太魂院ふとたまに名称変更せよ、との啓示をいただきました。さらに広がりを持つ宗教団

体として、新たな出発のときを迎えたのです。

今回の道場建て替えのことでは、私の家族もまた、私と同じ苦しみを味わいました。特に芳順夫婦にとつては、これまでにない大きな試練だったと思います。しかし、家族が一枚岩になって、腹を決めることで、今回のことが成就したと思います。私と苦勞をともにした経験は、息子や娘にとつてかけがえのない人生の肥やしになったことでしょう。

また、家族だけではなく、若い弟子たち、太魂院の役員一同、そして信者の皆様が一丸となり、体の動かない私を助け、この試練を乗り越えてくれたことが、何よりもうれしいことでした。太魂院の地盤がより一層踏み固められ、絆が深まったと思います。だるまになったことも無駄ではなかった、と思っています。

神から「人を救う使命」をいただき、その使命を果たすために全力を傾けてきた五十年。私は、これからが、太魂院にとって本当に大事な時期だと思っています。私

一人が支える宗教団体ではなく、弟子や信者の方々を含め、たくさんの方が支え、動かしていく宗教団体へと、太魂院は生まれ変わろうとしています。

いま、私はますます靈感が強くなり、精神的にはつらつとしています。また、太魂院にこれだけ多くの方が集い、院を盛り立ててくださろうとしていることに、心からの幸せを感じ、本当に感謝しています。そして、全身だるまのような状態になりながらも、信仰の道に打ち込み、人を幸せにすることに欲を持てる自分を、有り難いと感じています。これも、神と副主管である修法や皆様のおかげだと思っています。

素直な心で感謝して、神を崇めきり、慈悲と布施の心で功德を積む信仰を人々に教え、伝え継いでいく。皆様といっしょに、それを叶えていけることを、本当にうれしく思っています。私はいま、こんなにも幸せな人生を送らせていただいていることに、心から感謝しています。人こそ宝であり、太魂院の礎だと思っています。

思えば、私が生まれてからすでに七十五年もの年月が流れています。振り返ってみ

ると、私は誕生のときから、人とは違った命のいただき方をしています。その後、何  
度も命を失いかけ、ボロボロの体になりました。にもかかわらず、三重衝突事故で運  
ばれて以来、一度も救急車で運ばれることなく、病院に入院することもなく、いつも  
翌日から仕事に復帰しています。

これは、魂は天にありながら、神に使われる身として、この世に生をいただいたか  
らこそだと思っています。神の力によって、私は生かされているのです。そして、だ  
るまになつたいまなお、人を救う決意は研ぎ澄まされ、泉から水がわき上がるがごと  
く、法力がみなぎっています。

私は以前、ある易学の先生から「あなたの寿命は、注射でショック状態に陥ったと  
き、すでに尽きている。それなのに、いまこうやって生きていらっしやる。あなたの  
背中からは、徳分が噴き出している」と言われたことがあります。易学は、統計学か  
らきています。その先生は、易学を使ってご自身の寿命すら言い当て、本当にその通  
りの年齢で亡くなっています。しかし私の場合は、その先生が「あの時があなたの最

後の寿命」とおっしゃった年齢から、すでに三十年も長く生き続けています。神の力のおかげで、統計学の予想をはるかに上回って、私は生き続けているのです。

私たちは、自分の「宿命」を変えることはできません。宿命とは、この親元に生まれてきたという、そういう事実のことです。でも「運命」は変えていくことができます。運命は、徳分を積むことで変えられるのです。私が、寿命という運命を越えて、いままなお命があるのが、その証なのだと思います。

神から授けられた力と、この身を使い、信仰を通じて、“心の廃人”をなくすのが、私の生涯の仕事です。どんなに苦しいことがあっても、人は心のあり様ひとつで、必ず立ち上がれます。そして、運命は変えられます。そのことを、これからも多くの皆様に伝え、広めてまいります。

この本が、人々の心の灯火になることを願ってやみません。

おかげさまでありがとうございます。

# 無欲ほど 大きなしあわせ

---

2016年 5月5日 第1刷発行

著者 浅田妙浄  
発行所 宗教法人妙見宗 ふとたま 太魂院  
〒546-0035  
大阪市東住吉区山坂2-4-8  
TEL 06-6621-7558  
<http://www.futotama.com/>

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製・転載は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。本書の内容についてのお問い合わせは、太魂院までご連絡ください。